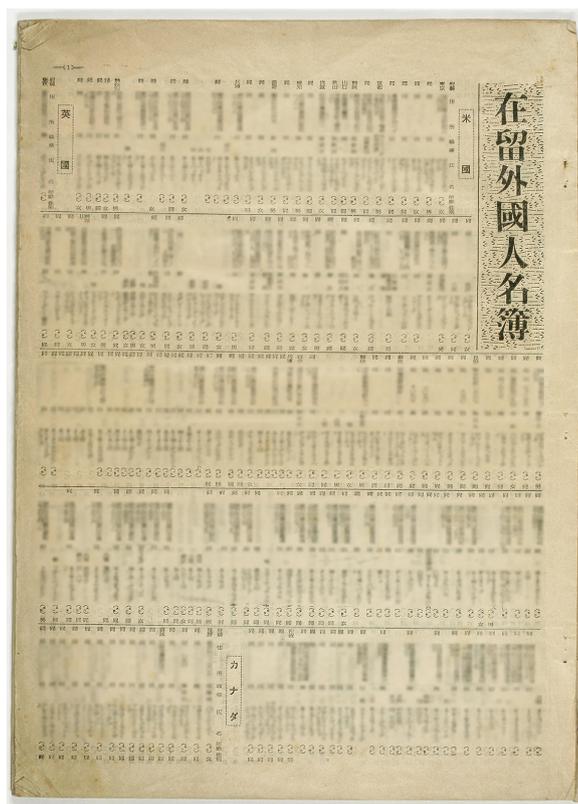


横浜ユーラシア文化館紀要
**Bulletin of
the Yokohama Museum of
EurAsian Cultures**

No. 9, 2021



横浜ユーラシア文化館
Yokohama Museum of EurAsian Cultures



「在留外国人名簿」外務省記録 K 門 3 類 7 項
「在本邦外国人ニ関スル統計調査雑件」第 4 卷
外務省外交史料館所蔵



No.1 小間嘉幸《草原の旅》油絵、キャンバス



No.24 小間嘉幸《マザリシャリフの巡礼》油絵、キャンバス

横浜ユーラシア文化館紀要 第9号
Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 9

目次
Contents

口絵
Plates

〈論文〉

1945年、神奈川県下の中国人社会 ―二つの名簿から見えるもの― 1
伊藤泉美

オホーツク文化の牙製婦人像 14
高橋 健

〈研究ノート〉

オホーツク文化の銛頭の分類についての覚書 39
高橋 健

〈資料紹介〉

洋画家小間嘉幸とそのシルクロード作品について 50
竹田多麻子

1945年、神奈川県下の中国人社会

－二つの名簿から見えてくるもの－

伊藤 泉美*

はじめに

本稿の目的は1945年に作成された二つの神奈川県在住中国人の名簿を分析し、県内在住中国人社会の状況を考察することにある。当時は神奈川県在住中国人の9割近くが、横浜市内に居住しており、本稿はほぼ横浜市内在住中国人社会の考察と言える。1945年以前に横浜に居住した中国人の名簿は、管見の限り、1877年の「明治十年在横浜清国人名簿」⁽¹⁾と本稿が分析対象とする二つの名簿だけである。居住地、職業、性別などが記された名簿を丹念に分析することは、当該時期の中国人社会の実像を知る上で極めて重要なことである。

本稿で取り上げる名簿の一つは米国議会図書館がマイクロフィルムで所蔵する「米軍接收資料」中に収められている名簿である。もう一つは外務省記録K門3類7項「在本邦外国人ニ関スル統計調査雑件」第4巻所収の「在留外国人名簿」⁽²⁾である。これは日本に在住する外国人の国籍別、居住都道府県別の名簿であり、本稿が検討対象とするのは、その中の「中華民国籍」の部分である。この二つの名簿により、当時の神奈川県在住中国人社会の人口構成、職業、居住地、また家族構成などについて考えていきたい。

名簿は、名前・年齢・性別・職業などの羅列だが、そこから当時の中国人社会の何がわかるのだろうか。また、記載されていないこと、換言すれば、記載されていることの裏側にあるものは何かも考えていきたい。

1 名簿の概要

(1)米国議会図書館所蔵米軍接收資料中の名簿(以下、「米議名簿」と略す)

米軍接收資料とは、日本に進駐していた連合国軍総司令部によって押収された文書である。⁽³⁾そのうちINYU KAJIN ROMUSHA MEIBO(移入華人労務者名簿)と題する文書の中に、本稿で検討する名簿が含まれている。この文書の注意書きには警保局書類中の華人労務者名簿と記されており、中国人労働者の所属する会社ごとの名簿など18の文書が収録されている、その一つ「神奈川県ノ分」⁽⁴⁾が神奈川県在住の中国人の名簿である。これは労務者、すなわち労働者に限ったものではなく、女性や子どもも含む県内在住中国人の名簿である。この名簿は今井清一氏が米国議会図書館の調査で発見され、複写を入手されている⁽⁵⁾。現在は、早稲田大学附属図書館がこの文書のマイクロフィルムを入手・閲覧公開している。名簿はすべて手書きで、項目は国籍、住所、職業、氏名、年齢、続柄、健康状態などである⁽⁶⁾。名簿の冒頭には集計数として、戸数は1525戸、人数は男1159人、女758人、計1917人と記されているが、今回入力してみると合計1895人の記載であった。集計人数の1917人には22人足りない。推測するに、この名簿は1枚に36人の名前が載っており、米国議会図書館の資料はマイクロフィルムであるので、最後の1頁を撮影し忘れた可能性がある。

(2)外務省記録の名簿(以下、「外記名簿」と略す)

外務省記録K門3類7項「在本邦外国人ニ関スル統計調査雑件」第4巻所収の「在留外国人名簿」は、

(1)伊藤泉美「1877年の横浜外国人居留地における中国人—『明治十年在横浜清国人名簿』の分析から」『横浜開港資料館紀要』第33号(横浜開港資料館、2015年、35-82頁)を参照されたい。

*Ito Izumi 横浜ユーラシア文化館副館長・主任学芸員

既述の通り、国籍別居住都道府県別の名簿である。そこから中華民国人のうち、神奈川県内に住所がある人びとをピックアップして分析した。この名簿は活版印刷されたものであるが、表紙には手書きで「在留外国人名簿 儀典班」と墨書されている。外務省の儀典班は駐日外国公館の支援業務なども担当していたが、その職掌から名簿を作成した主体とは考えにくく、また表紙だけ墨書であるため、これは「儀典班用」の意味と考えられる。

名簿の記載項目は氏名、住所、職業、年齢、性別であり、米議名簿にある続柄や健康状態の項目はない。なお、基本的には神奈川県内在住者は神奈川県としてまとめて記載されているが、一部は東京の頁に記載されていたものもあった。外記名簿には合計1948人の記載がある。

この二つの名簿の関係は判然としないが、内容がほぼ一致し、また米議名簿が手書きのため、まずはこちらの名簿が神奈川県庁など地方自治体よって作成され、それらを中央政府のいずれかの部署が統合して活字印刷したのが、外記名簿ではないかと推察される。

(3)名簿の作成時期

どちらの名簿にも作成年月日の明記がない。米議名簿には文書全体に押収された年、1945年とある。外記名簿には墨書された表紙に、「昭和十七、八年のもの 外務省年鑑にて」という、おそらく後年に書き足したと思われるペン字のメモがある。このメモから当初は1942年頃に作成されたと考えていた。

しかし、調査を進めるにつれ、年齢が合わない人が多いことに疑問を抱いていたところ、名簿に記載されている陳民楷氏ご本人より「住所が清水ヶ丘になっているのは、1945年5月29日の大空襲で焼け出された後に移転したからだ」との証言を得た⁽⁷⁾。

「空襲で避難」というヒントを得て、もう一度外記名簿を見てみると、ある家族の箇所が目がとまった。南区堀ノ内町でピアノを製造していた李民華一

家である。李民華一家の世帯に、民華の親である李佐衡一家と、民華の妻、李全英の親潘悦財一家も同居しているのである。以前、李全英（故人）にインタビューした際、1945年4月15日の空襲で堀ノ内町は被害にあい、道路の反対側にあった李佐衡一家が暮らしていた李兄弟ピアノ製作所が焼けてしまい、一緒に暮らすことになった。さらに5月29日の大空襲で、山下町の実家も焼けてしまい、親の一家も李民華家に身を寄せたと語っていた⁽⁸⁾。

以上のことから、この二つの名簿は少なくとも1945年6月以後に作成のものであると言える。なお、どちらの名簿にしても1945年の夏という戦争末期ないしは敗戦後の混乱期につくられたものであることから、記載内容には不備がある。今回、本稿を執筆するにあたって、1940年生まれの横浜山手中華学園理事長の曾徳深氏に名簿を見ていただいた。その結果、名前や年齢に間違いがあること、またそもそも確かに1945年夏には横浜にいたにもかかわらず、どちらの名簿にも曾徳深氏自身の名前がないなど、名簿に掲載されていない人がいることも確認された。

このように当時の神奈川県内に住む中国人全員を網羅するものでないこと、また記載内容に誤りがあることは留意しなければならない。ただし、当該時期の県内在住中国人の状況をこれほど具体的に知りえる資料はないため、本稿において職業や居住地などのデータを数量的に分析し、当時の県内中国社会の経済的・社会的状況を考察することは、少なからぬ意味があると考えられる。

2 分析

(1) 分析方法

まずは米議名簿、外記名簿、それぞれの記載内容を入力し、その上で二つの名簿を統合し、さらに一つの名簿で複数回掲載されている重複者を省いた名簿を作成した。二つの名簿を統合するにあたって、共通基本項目は氏名としたが、当該個人の氏名だけ

(2) この名簿の存在は陳來幸氏にご教示いただいた。

(3) 接収の経緯等と一部文書の概要については、上山和雄「米国議会図書館に遺された接収文書」『國學院大学紀要－文学研究科』第48輯（國學院大学、2017年、19－42頁）

を参照されたい。

(4) 目次には「神奈川県ノ分」とあり、本文表紙には「神奈川県横浜ノ分」と記されているが、横浜市以外の神奈川県内在住者も含む名簿である。

でなく、家族の成員が同じか、年齢が同じかなど、名前以外の要素も加味して判断した。重複者か否かについても同様である。米議名簿の記載数は1895、外記名簿の記載数は1948で、米議名簿にある1895人分の記載内容は外記名簿の記載内容とほとんど一致した。米議名簿にはなくて外記名簿にあるのは53記載で、逆に米議名簿にあって外記名簿に無いのは3記載であるため、1948に3を足すと、記載総数は1951である。

ただし、これは重複者を含んだ数字である。重複記載は合計175人で一人は3回掲載されている。つまり86人が2回、1人が3回掲載されているため、87人分88データが重複しており、それを記載総数1951人から除くと1863人分の記載となる。重複記載については、87人中75人が異なる住所で2か所に記載されていた。そのほとんどが山下町など都心部とそれ以外の場所、市内ならば郊外、市外ならば箱根などであるので、これは戦時下の移転・疎開のためと考えられる。

以下は重複者を除いた1863人についての考察であるが、分析に使うデータは住所によって2種類作成した。一つは移転前と判断される都心部のものでデータC1、もう一つは移転後と判断される郊外部のものでデータC2である。重複者87人について、各項目のデータがすべて一致は7人、そのほかは異なる項目ごとに人数をまとめると、住所のみが60人、住所と名前の漢字（音は同じなので誤記と思われる）が2人、住所と年齢が10人、住所と職業が2人、住所と性別が1人、職業のみが2人、名前の漢字と年齢が1人、年齢が2人である。なお、年齢については誤差が数年の範囲であり、大きく異なる人物は別人物と判断した。

(2) 家族構成など 性別・年齢・続柄

ここでは移転前のC1のデータを用いた。外記名簿では続柄の明記がないため、外記名簿にない人の

続柄については、世帯人数、家族構成、年齢などから判断した。

表1は性別の集計であるが、1863人の内、男性が1128人で60.5%、女性が735人で39.5%となり、ほぼ6割と4割である。女性の割合が3割を超えると社会の再生産が進む定住型社会と言われるが、横浜に中国人が進出した幕末の段階からすでに100年近くが経っており、神奈川県下の中国人社会は定着が進んだ状況であったと言える。

表2は年齢の集計である。1863人中27人の年齢が不明であるため、%では若干の誤差が生じる数値であることはご了解願いたい。第一の特徴としては、若年層の割合が非常に高いということだ。19歳までの未成年の人口総計は880人で全体の50%ほどになり、これに20代も加えると、1087人で全体の60%近くに達する。20代から50代までの当時の感覚では現役世代は全体の48%である。一方、60代以上の高齢者は全体の3.3%に過ぎない。

表3は続柄の集計である。戸主が566人、妻が251人（うち嫁が4人）で13.5%、長女以下子どもと見なされる家族は890人で47.8%、戸主の親の世代は25人で1.3%、戸主の兄弟姉妹ほかの親族が76人で4.1%、同居人・雇用人が50人で2.7%、不明が5人で0.3%である。また、表4で戸主の属性による分類を行ったが、子どものいる戸主は566人中327人で58%、子どものいない戸主は239人で42%であった。

このことから当時の神奈川県下の中国人社会は、6割近くが親とその子どもによって構成される世帯であり、若年層が人口の大半を占める社会であったと言える。一方、表3に戻って確認すると、戸主の親は25人と少なく、親と同居している世帯が1%足らずの状況であった。親世代が少ない理由として推測されるのは、1945年は戦時下であるため、中国出身であったり、中国とのつながりが深かったりした親世代は帰国していたことが考えられよう。

実際、1889年に横浜にやってきた福建省福清県

(5)『読売新聞』神奈川県版、1996年6月19日号。

(6)国籍、住所、職業、氏名、年齢、続柄、健康状態のほか、判読不明な項目が一つあるが、最初の2人に「無」と読めるだけで、以下の人びとについては空欄である。

(7)陳民楷氏インタビュー。2020年3月6日、12月17日実施。

(8)李全英氏インタビュー、財団法人中華会館・横浜開港資料館編『横浜華僑の記憶』（中華会館、2010年）、139-140頁。

(9)伊藤泉美「家族の肖像3 魏家—福建系実業一家の120年」『横浜中国人150年—落地生根の歲月』（横浜開港資料館編、2009年）、40頁。なお、魏宗鑿一家は5月29日

表1 1945年 神奈川県在住中国人 性別人口
©itoizumi2021

性別	人数	%
男	1128	60.5
女	735	39.5
合計	1863	100.0

表2 1945年 神奈川県在住中国人 年代別人口集計
©itoizumi2021

年齢	人数	%	
1～9	471	25.3	47.3
11～19	409	22.0	
20～29	207	11.1	48
30～39	269	14.4	
40～49	307	16.5	
50～59	111	6.0	3.3
60～69	49	2.6	
70～79	12	0.6	
80*	1	0.1	
不明	27	1.4	
合計	1863	100.0	

注：重複者を除いたC1データで分析。
* 80代は80歳が1人のみ。

出身の魏光焯は、山下町で貿易商同源泰を営んでいたが、1937年に日中戦争が勃発すると、横浜生まれの長男魏宗鑾一家を横浜に残し、魏光焯自身は帰国している⁽⁹⁾。同様に山下町で老舗料理店聘珍楼を営んでいた鮑莊昭は広東と横浜を行き来する生活を行っていたが、日中戦争勃発後は店の経営を息子の鮑金鉅に任せて帰国している⁽¹⁰⁾。

戸主と妻について

続柄の集計数や名簿を眺めていて、不思議なことに気付いた。戸主の人数と妻の人数に倍以上の開きがあるのである。だからといって独身の戸主が多いというわけではない。名簿には戸主と子どもだけの世帯が非常に多いのである。中国人の名簿で戸主(ほぼ父親)と子ども世帯が多いことは、1877年の名簿を分析した際にも指摘したが⁽¹¹⁾、このことは何を意味するのだろうか。この名簿は中華民国籍の名簿であるから、妻が他の国籍の場合は記載されないのである。すなわち、名簿には掲載されていない日本

表3 1945年 神奈川県在住中国人 続柄別人口
©itoizumi2021

続柄	人数	%	
戸主	566	30.4	
妻	247	13.5	
嫁	4		
長女	195	890	47.8
長男	241		
次女	120		
次男	122		
三女	60		
三男	69		
四女	23		
四男	23		
五女	9		
五男	7		
六女	4		
六男	4		
七男	1		
娘(推)	10	25	1.3
養女	2		
父	4	76	4.1
母	21		
兄	2		
弟	28		
兄弟	1		
妹	20		
義姉	1		
孫	9		
妹夫	1		
伯母	1		
姪	6		
甥	7		
同居人	47	50	2.7
雇用人	3		
不明	5	5	0.3
合計	1863		100.0

注：重複者を除いたC1データで分析。

国籍の妻の存在が浮かび上がってくるのである。実際、筆者の知人で母が民族的に日本人という方々については、ご本人の名前と戸主(父親)の記載はあるけれども、妻(母)の記載はないのである。

そこでこの民族的に日本人妻の存在を推測するために作成したのが表4と表5である。これらは戸主と妻の属性を分類したものである。表4は戸主の分類で、1から8に分けてみた。分類1は名簿上に中国人の妻や子どもがいる戸主226人で全体の39.9%である。分類2は名簿上に民族的には日本人(国籍は中国)の妻、子どもがいる戸主である。分類3は

の横浜大空襲後は親戚を頼って新潟に移転したせいか、今回考察対象とする名簿には記載がない。

(10) 伊藤泉美「家族の肖像2 鮑家—広東香山から横浜へ」『横浜中国人150年—落地生根の歲月』428頁。鮑金鉅一家

は二つの名簿どちらにも記載がある。

(11) 伊藤泉美「1877年の横浜外国人居留地における中国人」。また同年の長崎の清国人名簿を分析した布目潮風も同様に清国人名簿にない日本人妻の存在を指摘している。「明

名簿上に妻はいないが子どもがいるため、妻の国籍は不明、分類4は名簿上に妻はいないが子どもがいて、妻は民族的に日本人の可能性ありである。分類5から分類8の属性は、表4の説明の通りである。

ここで問題となるのは、分類2から分類4である。もちろん妻と離別・死別も考えられるため、あくまで推定値ではあるが、妻が民族的に日本人の可能性が高い分類2から分類4を合計すると96人で16.9%である。分類7と分類8は妻と子どもの記載がないので单身とも考えられるが、記載されていない日本人の妻がいる可能性はある。ということは、少なくとも17%以上の世帯で日本人の妻がいたと推測できるのである。この人数は少なくはない。

家族の中に日本人がいることは、戦時下を生き抜く上で利点ともなった。例えば母が日本人であった伏見（梁）志雄は、憲兵隊に呼ばれていろいろ聞かれたが、母が日本人だったので特別に学徒動員で軍需工場に行くことができたと言っている¹²⁾。また同じく母が日本人の鈴木（陳）成喜は、1945年5月29日の横浜大空襲の前日、平塚の母の実家に荷物を疎開させていたので、家財の空襲の被害は最小限に済んだと言っている¹³⁾。

なお、分類2・分類4・分類6で民族的に日本人であるかどうかの判断は、妻と子どもの名前、例えば「留子」などの日本的な名前かどうかと、筆者が名簿上の家族の状況を把握しているかどうかによって決まる。

表5は妻247人について、その名前から属性を分析したものである。分類1は夫婦別姓か両姓併記の場合である。中国人は夫婦別姓であるが、婚家、つまり夫の姓を自分の姓の前につける場合もある。例えば、「張陳卓華」の場合は、「張」が夫の姓である。分類2はその略記である。この分類1と分類2の場合は、妻は民族的にも国籍的にも中国人であると考えられる。

今回の名簿では不思議なことに、夫婦同姓が散見される。これは中国人の習慣としては基本的にはあ

表4 戸主の属性による分類別人数

分類	人数		分類の説明
1	226		名簿上に中国人の妻や子どもがいる。
2	8		名簿上に民族的には日本人（国籍は中国）の妻、子どもがいる。
3	86	子供有 327人 (58%)	名簿上に妻はいないが子どもがいる。妻の国籍は不明。
4	2		名簿上に妻はいないが子どもがいる。妻は日本人の可能性有。
5	2		戸主が女性で中国人、子どもあり。
6	3		戸主が女性で日本人、子どもあり。
7	20	子供無 239人 (42%)	兄弟、姉妹、両親、甥、姪、叔父、伯母などの親族と同居。
8	219		妻・子ども記載無し。独身か内縁の妻（中国籍か日本国籍など）がいる。
合計	566		

注：C1 データで分析。

表5 妻の属性による分類別人数

分類	人数	分類の説明
1	143	夫婦別姓か両姓併記（フルネーム、姓のみ、張陳卓華など）。
2	50	両姓略記（例：劉陳氏）。
3	47	中国人妻と思われるが夫婦同姓。
4	5	日本人妻と思われるが夫婦同姓。
5	1	日本人妻と思われるが夫婦別姓。
6	1	その他（名前が不備で判断不可）。
合計	247	

注：C1 データで分析。

りえない。分類3は妻が中国人と思われるのに夫婦同姓の場合である。かつて筆者は前出の李全英に、夫が「李民華」であるのに、なぜ同じ姓の「李」なのかを尋ねたことがある。答えは「日本の役所ではそういうふうに使われた」とのことであった。本来は「潘全英」なのであるが、夫婦同姓が基本の日本の役人の発想では、妻の姓に重きがおかれず、戦時下の混乱の中で調査が行き届かず、夫婦同姓として記載されていたと考えられる。夫婦同姓の場合は日本人が妻の場合もありえ、分類4とした。例えば、伊勢佐木町の老舗中華料理店博雅の経営者鮑博公の妻は、鮑留子と記載されているが留子は民族的には日本人であることが知られている。こうした事例が他にもみられる。

治十一年長崎華僑試論—清民人名戸籍簿を中心として、山田信夫編『日本華僑と文化摩擦』（巖南堂書店、1983年）、207、208頁。

12) 伏見志雄氏インタビュー。2005年8月23日。

13) 鈴木成喜氏インタビュー。2004年11月17日。

(3)居住地の分析

表6は神奈川県内在住中国人の居住地についてまとめたものである。表6ではC1とC2の2種類のデータに基づき分析した。これは、既述の通り、名簿に複数回（3回の一人を除いて2回）記載されている者で、住所が異なって記載されている者がいるためだ。これは空襲などにより移転したためと考えられ、二つを比較することで戦時下の居住状況がより具体的に理解できる。移転前は横浜市中区山下町などの都市部が多く、移転先は箱根の仙石原や強羅が多い。こうした状況を把握するため、2種類のデータを利用して分析した。表6の「人数C1（移転前）」と「人数C2（移転後）」である。

C1 移転前を見ると、1863人のうち、横浜市内在住者は合計88.3%で、その他県下は11.6%で、ほぼ9割が横浜市内在住であった。とりわけ、全体の68.5%、7割近くが横浜市中区に居住し、中でも山下町には1021人で全体の54.8%が住んでおり、旧外国人居留地である山下町とその近隣に集中して中国人が居住していた状況がわかる。

ただし、その一方で、中国人が居住する場所は県内100の町村に及び、5割近くは山下町以外の当時の中国人が言うところの「日本町」に住んでいた。1899年の外国人居留地撤廃から半世紀近くが経った段階では、県内各所で中国人が暮らしを営んでいた状況が浮かび上がる。

戦時下であるため、県下郡部、とりわけ足柄下郡の宮城野や底倉など箱根地域の居住者が多い点も注目すべきである。その傾向は移転後C2の人数ではさらに顕著となり、C1とC2を比較すると戦時下の居住状況が見えてくる。最も顕著な現象は山下町の減少と宮城野の増加である。山下町は1021人から955人へと66人が減少しており、横浜市中区全体としての割合も68.5%から65.1%へと減少している。その一方、宮城野の人数が74人から93人へ増えており、全体として県下郡部の居住者の割合は9.7%から11.0%へと増加している。ただし、箱根

に疎開できるのは富裕層が中心であった。多くの中国人は山下町の自宅に防空壕を掘って空襲に備えていた。1945年5月29日の横浜大空襲で家が焼失してしまった後は、市内の当時はまだ郊外であった、南区の清水ヶ丘・笹下町・堀ノ内町などに避難した状況が当該地域の人数が増えている点から読み取れる。

なお、移転前の住所と移転後の住所で二か所に掲載されている重複者と、移転後の住所だけで掲載されている場合とがある。重複して掲載されている事例として、山下町でトムサン・テーラーを営んでいた張方廣一家がある。張一家は山下町と箱根宮城野の2か所に出ている。同じく南区堀ノ内町で周興華洋琴専製所を営んでいた周讓傑一家も堀ノ内町と宮城野の二つの住所で掲載されている。この二家族は5月29日の大空襲以前に疎開していた。一方、移転先の住所の1か所にしか記載されていない事例として、1945年の横浜大空襲後に移転した前述の陳民楷氏や李ピアノの関係者である。移転・疎開の時期が関係しているのかとも思えるが、大空襲前に箱根の底倉に疎開していたことがわかっている羅孝明一家は、山下町で中華料理店の安楽園を営んでいたが、名簿上の記載は底倉のみとなっており、2か所の住所で掲載されている場合とそうでない場合の理由は判然としない。

(4)職業の分析

表7は職業について集計したものである。C1データに基づき集計した。まずは前提として、1945年夏頃の状況であるため経済活動がかなり停滞していることを考慮すべきである。無職の割合は66.4%で、有職者は33.6%、この数値は戸主の30.4%に近いので、有職者はほぼ戸主とみなしてよいだろう。

職業を大分類、中分類、職業名に分けて集計した。大分類ではサービス業が69.2%とほぼ7割で最も多く、ついで工業の19.2%ほぼ2割である。この二つで全体の9割を占めていた。就業人口が比較的

表6 1945年 神奈川県在住中国人の居住地状況 ©itoizumi2021

	地域分類	地名	人数 C1 (移転前)			人数 C2 (移転後)			人数 1-2	備考
			人数	地域別 人数	地域別 %	人数	地域別 人数	地域別 %		
1	1	横浜市中区 山下町	1021	1277	68.5	955	1213	65.1	-66	山下町の割合は54.8%から51.3%へ減少。
2		横浜市中区 元町	55			51			-4	
3		横浜市中区 伊勢佐木町	35			35			0	
4		横浜市中区 西ノ谷	24			24			0	
5		横浜市中区 本郷町	19			20			1	
6		横浜市中区 本牧町	15			16			1	
7		横浜市中区 麦田町	11			11			0	
8		横浜市中区 弁天通	11			11			0	
9		横浜市中区 山元町	9			10			1	
10		横浜市中区 上野町	8			8			0	
11		横浜市中区 石川町	8			8			0	
12		横浜市中区 大和町	7			7			0	
13		横浜市中区 柏葉	7			7			0	
14		横浜市中区 山田町	6			6			0	
15		横浜市中区 福富町	6			6			0	
16		横浜市中区 磯子町	5			5			0	
17		横浜市中区 鷺山	5			5			0	
18		横浜市中区 千代崎町	1			5			4	
19		横浜市中区 北方町	5			5			0	
20		横浜市中区 海岸通	4			4			0	
21		横浜市中区 吉浜町	4			4			0	
22		横浜市中区 常磐町	3			3			0	
23		横浜市中区 末吉町	2			2			0	
24		横浜市中区 曙町	2			2			0	
25		横浜市中区 尾上町	2			2			0	
26		横浜市中区 竹之丸	1			1			0	
27		横浜市中区 太田町	1			0			-1	
28	2	横浜市南区 清水ヶ丘	30	165	8.9	37	196	10.5	7	
29		横浜市南区 笹下町	22			32			10	
30		横浜市南区 堀ノ内町	18			21			3	
31		横浜市南区 宮元町	17			15			-2	
32		横浜市南区 別所	11			15			4	
33		横浜市南区 中里町	9			14			5	
34		横浜市南区 大久保町	8			9			1	
35		横浜市南区 東蒔田町	9			9			0	
36		横浜市南区 井土ヶ谷町	8			8			0	
37		横浜市南区 花ノ木町	8			8			0	
38		横浜市南区 六ツ川	4			7			3	
39		横浜市南区 八幡町	7			7			0	
40		横浜市南区 南太田町	4			4			0	
41		横浜市南区 高根町	3			3			0	
42		横浜市南区 中村町	3			3			0	
43		横浜市南区 永田町	2			2			0	
44		横浜市南区 新川町	1			1			0	
45		横浜市南区 通町	1			1			0	
46	3	横浜市神奈川区 魚住町	6	53	2.8	6	61	3.3	0	
47		横浜市神奈川区 鳥越町	1			1			0	
48		横浜市神奈川区 宮前町	3			3			0	
49		横浜市神奈川区 松本町	22			23			1	
50		横浜市神奈川区 斎藤分町入口	9			9			0	
51		横浜市神奈川区 金港町	8			8			0	
52		横浜市神奈川区 三ッ沢上町	0			7			7	
53	横浜市神奈川区 六角橋	2	2	0						

	地域分類	地名	人数 C1 (移転前)		人数 C2 (移転後)			人数 1-2	備考
			人数	地域別 人数	地域別 %	人数	地域別 人数		
54	3	横浜市神奈川区	1	53	2.8	1	61	3.3	0
55		横浜市神奈川区	1			1			0
56	4	横浜市西区	11	56	3.0	11	57	3.1	0
57		横浜市西区	9			9			0
58		横浜市西区	8			8			0
59		横浜市西区	6			6			0
60		横浜市西区	6			6			0
61		横浜市西区	3			4			1
62		横浜市西区	4			4			0
63		横浜市西区	4			4			0
64		横浜市西区	3			3			0
65		横浜市西区	2			2			0
66	5	横浜市保土ヶ谷区	7	31	1.7	7	31	1.7	0
67		横浜市保土ヶ谷区	6			6			0
68		横浜市保土ヶ谷区	4			4			0
69		横浜市保土ヶ谷区	4			4			0
70		横浜市保土ヶ谷区	4			4			0
71		横浜市保土ヶ谷区	3			3			0
72		横浜市保土ヶ谷区	2			2			0
73		横浜市保土ヶ谷区	1			1			0
74	6	横浜市港北区	17	33	1.8	17	33	1.8	0
75		横浜市港北区	7			7			0
76		横浜市港北区	5			5			0
77		横浜市港北区	4			4			0
78	7	横浜市鶴見区	24	30	1.6	25	32	1.7	1
79		横浜市鶴見区	3			4			1
80		横浜市鶴見区	3			3			0
81	8	神奈川県平塚市	10	36	1.9	10	34	1.8	0
82		神奈川県川崎市	10			8			-2
83		神奈川県藤沢市	6			6			0
84		神奈川県川崎市	5			5			0
85		神奈川県藤沢市	3			3			0
86		神奈川県平塚市	2			2			0
87	9	神奈川県足柄下郡	74	181	9.7	93	205	11.0	19
88		神奈川県足柄下郡	40			40			0
89		神奈川県足柄下郡	18			19			1
90		神奈川県足柄下郡	12			12			0
91		神奈川県中郡	9			11			2
92		神奈川県足柄下郡	7			7			0
93		神奈川県足柄下郡	7			7			0
94		神奈川県鎌倉郡	5			5			0
95		神奈川県鎌倉郡	3			3			0
96		神奈川県足柄下郡	2			2			0
97		神奈川県足柄下郡	0			2			2
98		神奈川県中郡	2			2			0
99		神奈川県足柄下郡	1			1			0
100		神奈川県鎌倉郡	1			1			0
101	1	記載なし	1	1	0.1	1	1	0.1	0
			1863	1863	100.0	1863	1863	100.0	0

宮城野居住人口は全体の4%から5%へ増加。

表7 1945年 神奈川県在住中国人の職業状況 ©itoizumi2021

職業大分類	職業中分類	職業名	人数	対有職者人口%	職業大分類合計	対有職者人口%	備考
農業	農業	農業	1		1	0.2	
工業	印刷	印刷業	5		120	19.2	洋服業、洋服職等。経営者か職人かの判別は困難。
	建築業	ペンキ塗装業	6				
	建築業	塗業	2				
	建築業	硝子商	1				
	製造	洋裁関係業	69	11.0			
	製造	籐椅子製造	5				
	製造	ピアノ製造	4				
	製造	製麺業	1				
	その他	職工	17				
	その他	自動車修理工	5				
その他	工員	5					
商業	金融	銀行員	3		23	3.7	
	貿易・物販	雑貨商	7				
	貿易・物販	呉服行商	4				
	貿易・物販	呉服商	3				
	貿易・物販	薬商	2				
	貿易・物販	小間物行商	1				
	貿易・物販	リス商	1				
	貿易・物販	貿易商	1				
貿易・物販	セールス	1					
サービス業	飲食	料理職	359	57.3	433	69.2	料理職(元・前含む)303、料理人54、コック1、厨婦1。
	飲食	料理業	36	5.8			
	飲食	ボーイ	1				
	その他	理髪職	25	4.0			
	その他	理髪業	9	1.4			
	その他	洗濯業	2				
	その他	家事使用人	1				
公務自由業	医者	医者	1		28	4.5	大使、領事、書記、書記官、補佐官、武官、秘書。
	官公庁雇い	官公庁	21	3.4			
	教育	教師	3				
	自由業	著述業	1				
	その他	検数員	2				
業種不明(雇用人)		会社員	11		21	3.4	
		事務員	8				
		店員	1				
		人夫	1				
有職者合計					626	100.0	
					無職の対人口%		
無職		無職	1216		1237	66.4	男493、女723。
		学生	21				男17、女4。
合計人数			1863				

注：C1 データで集計。

多い職業について個別に%を示した。最も多いのは、料理職 57.3%、料理業 5.8%で両者合計の飲食業で 63.1%となる。次いで洋裁関係業の 11.0%である。なお、料理職は料理人、コック、料理業は経営者とみなされるが必ずしも明確に分類されていない可能性がある。洋裁関係業については、一括したが、それは職業欄で「洋服業」「洋服職」などと異なる記載がされており、「洋服職」であっても明らかに経

営者である例が見られるからである。「理髪職」「理髪業」も同様であり、職人と経営者の区別が鮮明ではなく、実際に職人＝経営者である場合も多々ある。

なお、中国人の代表的職業として「三把刀」-三つの刀を使う職業で料理、理髪、洋裁-と言われるが、横浜を中心とする神奈川県下の場合は圧倒的に料理業で、次いで洋裁関係業、理髪業は5%足らずで、料理業の10分の1にも満たない状況であった。

表8 1945年 神奈川県在住中国人の地域別職業集計 (単位:人) ©itoizumi2021

職業大分類	職業中分類	職業名	中	神奈川	南	鶴見	港北	保土ヶ谷	西	県内市部	県内郡部	不明	合計	
農業	農業	農業								1			1	
工業	印刷	印刷業	5										5	
	建築業	ペンキ塗装業	5		1								6	
	建築業	塗業			2								2	
	建築業	硝子商		1									1	
	製造	洋裁関係業	63							1	5		69	
	製造	籐椅子製造	4		1								5	
	製造	ピアノ製造	1		3								4	
	製造	製麺業	1										1	
	その他	職工	13		4									17
	その他	自動車修理工	2	1					2					5
その他	工員	4								1			5	
商業	金融	銀行員	3										3	
	貿易・物販	雑貨商	5	2									7	
	貿易・物販	呉服行商			1	1			2				4	
	貿易・物販	呉服商	3										3	
	貿易・物販	薬商	2										2	
	貿易・物販	小間物行商							1				1	
	貿易・物販	リス商	1										1	
	貿易・物販	貿易商	1										1	
貿易・物販	セールス	1										1		
サービス業	飲食	料理職	291	6	10	14		5	9	7	16	1	359	
	飲食	料理業	10	4	11	1	2	1			7		36	
	飲食	ボーイ									1		1	
	その他	理髪職	12	2			2	5	3		1		25	
	その他	理髪業	1		5		3						9	
	その他	洗濯業										2	2	
公務自由業	その他	家事使用人	1										1	
	医者	医者	1										1	
	官公庁雇い	官公庁	2								19		21	
	教育	教師	3										3	
	自由業	著述業										1	1	
業種不明(雇用人)	その他	検数員	2										2	
		会社員	10								1		11	
		事務員	6							2			8	
		店員	1										1	
合計人数			455	16	38	16	7	11	17	12	53	1	626	

注: C1 データで集計。

「官公庁」が21人と多いが、これはほとんどが宮城野と底倉に疎開していた中華民国の大使館の関係者の人数である。

また、「貿易商」が一人しかいない点も注目に値する。もともと横浜には、日本産の海産物や乾物などを中国に輸出し、逆に菓種や砂糖などを日本に輸入する中国人貿易商が少なからずいたが、1923年の関東大震災の被害によって従事者が減り、さらに1937年の日中戦争勃発によって日中間の貿易活動がほぼ途絶えた。こうした状況を如実に反映した数字と言える。

表8は職業と居住地の関係を考察するために作成した。人口が横浜市中区に集中しているため、ほとんどの職業で中区が最多であるが、職業によっては他の地域にも分散的なものが見られる。顕著なものは、就業人口も最多である飲食業（料理職・料理業）で、市内神奈川区、南区、鶴見区、保土ヶ谷区、西区、県内市部および郡部に居住しており、県下各地で中華料理業を営んでいた状況が読み取れる。理髪業についても同様の傾向が指摘できる。また、呉服行商、小間物行商は中区には就業者がいない点も注目すべきである。呉服行商は福建省出身者の特徴的職業であり、主に山下町を中心とする広東省出身者

のグループとは異なる。

(5)名前から見えてくるもの

1945年に神奈川県内に暮らしていた中華民国籍の人びとの名簿を見ていく中で、注意をひかれるのは、日本的な名前が散見されることである。中国人の名簿なのであるが、日本的な名前の人びとが少なからずいるのである。これはどうしたことなのかと理由を探るため、作成したのが表9である。

「日本的な名前」とは何かの判断は主観的な判断を免れないが、例えば「久子」「和子」「静子」「いね」「とめ」「久夫」など日本人に特徴的な名前と、「幸雄」「正治」「正男」など中国人の名前としてもありえるが、どちらかというとい日本人的なものも含めて、ここでは日本的な名前と判断した。該当者は93人である。これはあくまで筆者の判断によるものであるから、確定的な人数ではないが、以下のとおり興味深い状況が読み取れたので、本稿に記しておきたい。

表9にまとめたが、まずは日本人の名前の該当者93人を居住地で見ると、名簿全体では山下町居住者が6割近くだということに、日本人の名前の人びとは8割が所謂日本町に暮らす人びとである。ま

表9 日本人の名前の分析 合計93人

居住地別

	人	%
山下町	18	19.4
その他	75	80.6
合計	93	100.0

性別

	人	%
女	70	75.3
男	23	24.7
合計	93	100.0

分類別

分類		人数	うち 確定人数
1	本人が日本人かその可能性有、確定している場合は（確）	13	2
2	名簿にある母が日本人かその可能性有、確定している場合は（確）	31	1
3	名簿上に母の記載がないが、その母が日本人かその可能性有、確定している場合は（確）	37	3
4	祖母が日本人判明している	3	
5	母は中国人	7	
6	その他	2	
合計		93	

注：筆者が該当家族の状況を把握している場合は「確定」とした。

た、男女別では女性の割合が圧倒的に多い。呉服行商は日本町に暮らす福建人が多かったが、福建人は女兒に「〇〇子」という日本的な名前をつける場合が多く、その理由は日本人と結婚した場合、日本人社会に馴染んで苦勞せずに暮らしていけるよという親心からだと言われる。その傾向がこの名簿からも推測されよう。なお、男性の場合は「昭雄」「勇治」など日中どちらでも読める名前が多い。また日本人的名前と見なされた93人は、兄弟姉妹が同じ傾向であるが、兄弟は中国人的な名前で姉妹だけ日本人的な名前の場合も見受けられる。

さらに、日本人的名前の人びとの属性を考えてみた。表9の「分類別」の箇所である。分類1は本人が日本人である可能性、分類2は名簿にある母が日本人の場合、分類3は名簿に母はいないが日本人である可能性がある場合、分類4は祖母が日本人の場合である。日本人的名前の93人のうち、13名は本人が民族的には日本人と考えられる。そのほか、母が中国人と考えられる7名と不明の2名をのぞいた71人は、何らかの形で親族、特に母が民族的に日本人と考えられる。

名前は本人のアイデンティティに深くかかわる問題であるが、日本人的な名前は日本に暮らす華僑ならではの特徴と言えるだろう。親族、特に母が民族的に日本人である場合は、母方の祖父母をはじめ親族が日本人であるから、その影響で習慣的に日本人的な名前を付けたと考えられる。また民族的には中国人であるが、日本の社会、とりわけ日本人町で暮らす中国人の場合は、周囲を日本人に囲まれての環境の中で子どもたちを育てるわけで、学校も中華学校ではなく日本人の学校へ通う場合が多かった。また特に女兒に日本人的な名前が多いのは、婚姻後の生活への配慮が考えられる。中国人家族の置かれた居住状況を反映し、周囲の日本社会との協調を志向する心情の表れといえよう。

おわりに

以上、1945年に作成された、神奈川県在住中国人の名簿を分析してきた。名簿とは名前、住所、性別、職業などの羅列であるが、それを考察することによって、当時の神奈川県の中国人社会の何がわかったのだろうか。詳細は繰り返さないが、以下、三つの点について論じて結語としたい。

(1)戦時下の様相

この名簿が作成された1945年は、居住地日本と母国ないしは祖先の国である中国とが戦火をまじえる事態であった。当時の県内居住中国人の状況は、居住地と職業を考察することによって浮かび上がってきた。

居住地は旧外国人居留地の山下町に6割ほどが居住していたが、残りの半数近くはいわゆる「日本町」に住んでおり、神奈川県下100の町村に中国人の暮らしがあった。山下町に暮らす中国人でさえ、近所の日本人から差別的な言動を受けたという。ましてや、周囲をぐるりと日本人に囲まれた日本町での戦時下の生活はきわめて厳しいものであったに違いない。

戦時下に箱根などに疎開できたのは少数の人びとであり、大半が山下町や元町など都市部で暮らしていた。そして5月29日の大空襲によって、自宅を失った人びとが、横浜市内の郊外部に身を寄せていた実態が読み取れた。

職業についていえば、当該時期は料理業の就業者が6割ほどで、市内各地と県郡部に点在しており、日本町で中華料理店を営みながら暮らしていた多くの中国人家庭の存在が見て取れる。一方、貿易商が一人しかいないことは、日中間の戦争勃発によって、貿易活動がほぼ途絶えたことを如実に物語っている。

(2)家族の中の日本人

名簿に記載されていることからだけでなく、記載さ

れていないことを読み取ることも重要である。今回分析した名簿では、明らかに戸主と妻の人数に開きがあり過ぎ、そのことから、日本国籍の妻の存在が浮かび上がった。居住国の人びととの通婚が進むことで居住地社会への定着が進み、居住国社会の文化的影響を受けることは論をまたない。名簿中には日本人の名前が散見されることを指摘したが、そうした家庭では多くの場合、日本人の母や祖母の存在があった。彼女らの存在は中国人社会と居住国社会との紐帯であり、とりわけ戦時下においては居住地社会との摩擦を軽減する役割を果たしたと言えよう。

(3) 現地化が進んだ定住型移民系社会

性別・年齢・続柄および戸主の分析から、当時の神奈川県下の中国人社会では、未成年者の割合が5割近くを占め、親と子どもによって構成される世帯が6割ほどを占めていた。さらに夫婦の世帯や兄弟姉妹などと暮らす世帯を含めると、この社会は親族を基本とした家庭生活を営む人びとによって構成されていた社会であった。それは出稼ぎ型の外国人労働者の社会ではなく、横浜を中心とする神奈川県に生活の基盤をおいた定住型移民系社会であったといえる。

しかも、少なからぬ家族はその中に日本人を含んでおり、相当現地化が進んだ社会といえる。この現地化が進んだ定住型移民系社会が、居住国と祖先の国との間の戦闘状態に直面した場合、人びとはどのように生きねばならなかったのだろうか。国と国とは戦火を交えていたが、その中に生きる個々人には日々の生活の現実があった。1945年の名簿には、そうした1863人の生きざまが刻まれている。

オホーツク文化の牙製婦人像

高橋 健*

1. はじめに

オホーツク文化の牙製婦人像は、マッコウクジラなど大型の海獣の歯牙で作られた女性像であり、オホーツク文化を象徴する遺物の一つとされている。その容貌や衣装の表現、海獣牙という素材がエキゾチックな印象を与え、大陸からの強い影響を受けて成立したオホーツク文化のイメージとよく一致する。しかし、出土状況や共伴遺物などのコンテキストがわかる資料が乏しいこともあって、考古学的な検討は必ずしも十分に行われて来なかった。本論ではこれまでに知られている情報を整理した上で、若干の考察を試みたい。

本論の構成は以下の通りである。まず牙製婦人像の研究史を整理し、特に大陸における類例として注目されてきたサルモニー報告資料について検討する(第2章)。次にこれまでに報告された資料を集成し(第3章)、素材について考察した上で(第4章)、分類・編年案を提示する(第5章)。

2. 研究史

牙製婦人像が最初に報告された二十世紀初頭以降の研究史を、1950年代まで、1960～70年代、1980年代以降の3時期に区分して概観する。

2-1 1950年代まで

オホーツク文化の牙製婦人像の最初の報告例は、1901(明治34)年の『東京人類学会雑誌』に掲載された坪井正五郎の「北海道利尻島発見の海獣牙製の人形」と題する論文であり(坪井1901)、藤井秀の大野延太郎宛書簡を引用して、利尻島マタワッカ貝塚(亦稚貝塚)出土例がスケッチとともに紹介

された。

当時はまだ「オホーツク文化」が認識されるようになる前であり、坪井はこの資料を自身のコロボックル説(「石器時代」の住民が日本民族でもアイヌ民族でもなく、エスキモーに類似した民族だったとする説)を補強する材料として、エスキモーの海獣牙製人形と比較するために引用したのであった。「海獣牙製人形の発見は本邦石器時代人民とエスキモーとの類似を一層強くした」と結論づけている。

1930年代になると、北海道のオホーツク海沿岸と千島・樺太に分布する独自の土器・文化に対して、「オホーツク式土器」や「オホーツク文化」という名称が使われるようになった¹⁾。1940(昭和15)年、米村喜男衛と北構保男によって、「オホーツク文化圏出土の牙製婦人像」が発表された(米村・北構1940)。亦稚貝塚出土資料に、根室市弁天島遺跡と網走市モヨロ貝塚付近の採集例を加えた3点の資料が紹介されている。資料の来歴から帰属時期に問題が残るとしながらも、同一目的で作られた類型品だと考え、さらにこれらが非常に硬いマッコウクジラの牙を素材とすることから、彫刻には金属器が不可欠である点を指摘した。乳房と肥大した腰部、衣服の着想状態などから、「婦人たる事を殊に強調する特長」を有しており、さらに両手を前に組み合わせた姿勢が「敬虔さを表現」して「宗教的意味」をもつと推測している。米村は1950(昭和25)年にモヨロ貝塚付近採集資料を改めて報告したが、背部の浮彫を「洋服に見る如き襷」として「西洋文化の影響」を考えている(米村1950)。

1950(昭和25)年、大川清は「北方文化圏出土

*TAKAHASHI Ken 横浜ユーラシア文化館主任学芸員

の婦人像」を發表し、浜中付近採集⁽²⁾の牙製婦人像を新たに報告した(大川1950)。大川は前年夏に利尻島の発掘調査に参加し、同年夏には利尻礼文両島を踏査していた(大川1998)。この資料は1950年夏の礼文島訪問時に実見したものだろう。素材については、セイウチ牙製だとする考えを示した。婦人像の性格については、米村・北構(同前)と同様に、「全体的には同一の目的をもつて製作されたもの」で、「北方的色彩を強く持った比較的年代の新しい文化」の所産だと考えている。さらに前かがみの姿勢から、人間の目の位置よりも高い所に置かれたと考え、神像であり礼拝像であると結論付けた。礼文島北部では、1949(昭和24)年夏に北海道大学による船泊砂丘遺跡の発掘調査が行われていたが、1952(昭和27)年の報告で、同じ牙製婦人像がマッコウクジラ牙製として報告された(児玉・大場1952)。

2-2 1960年代～70年代

学術的な発掘調査による牙製婦人像の発見は、戦後まもなくモヨロ貝塚調査団によって発掘された網走市モヨロ貝塚におけるものが最初であった。この牙製婦人像は1948(昭和23)年の第二次調査において出土したが、この調査の報告は1964年に『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻の別篇として刊行されたため、前述した大川論文では触れられていない。1966(昭和41)年には根室市オンネモト貝塚でも牙製婦人像が出土した。オンネモト貝塚の速報で、「出土例こそ必ずしも多くはないが、もっともオホーツク文化的な遺物の1つとしてなじまれた遺物」と述べられているのが(北構・岩崎1967)、牙製婦人像の位置づけをよく表している。

1968(昭和43)年には、大塚和義による「オホーツク文化の偶像・動物意匠遺物」が発表された(大塚1968)。偶像(牙製婦人像)としては、従来報告されていた資料と上記の発掘例に加えて、礼文町神崎小学校⁽³⁾採集の2点、樺太(サハリン)本斗町南浜二丁目貝塚出土の1点を取り上げ、A～Cの3グ

ループに分類している。大塚はこれらをシャーマニズムと関連する遺物とみなしてオロッコやギリヤークなど北方民族の偶像と比較した。そして偶像を中心に山の神であるクマと海の神であるシャチの動物像を対置した「オホーツク文化における神概念」を提唱した。論文の最後では、「オホーツク文化ときわめて近似した文化遺物をもつ」アムール川流域のナイフェルド(ナイフェリト)遺跡の調査成果と、ロシアの研究者シェルが突厥文化との関連を想定した「北部モンゴリア」の偶像を紹介している。「オホーツク文化の担い手は、北部モンゴリア以西の地域と間接的にせよ接触があった」とし、オホーツク文化の起源について、「ナイフェルド周辺からアムール川の河口へでて、“海獣狩り”を体得し、なんらかの事情でいっきよに北海道の宗谷沿岸へ押し渡ってきた」という仮説を提示している。

1974(昭和49)年には、根室市オンネモト貝塚の報告書が刊行された。ここでは同遺跡から1966年に出土した資料が報告されるとともに、北構による付編「牙製婦人像について」において、類例10点⁽⁴⁾について等倍の実測図や写真が掲載され、考察が加えられた(北構1974)。大塚が紹介した「北部モンゴリア」資料については、サルモニー文献の抄訳を示して「南部モンゴリア」出土とした。マッコウクジラとセイウチの歯牙の断面写真を示して、素材についての検討も行っている。婦人像の系譜については、中国由来の杯をもつ婦人のモチーフが、シャーマニズム信仰をもつ突厥トルコ人に採用され、さらに黒竜江流域、樺太島の住民を経て、北海道オホーツク文化にもたらされたと推測した。シャーマニズムとの関連を想定する点や伝播の基本的なルートは大塚論文と共通するが、持ち込みと模倣、二次的な変容を考慮している点が異なっている。

1975(昭和50)年の『どるめん』誌の特集「北海の狩猟文化」のパネル・ディスカッション「海獣狩猟民・オホーツク文化の源流」において、大塚は、牙製婦人像を動物像とともにシャーマンがエクスタ

シー状態に入るための道具だとみなした（大塚他1975）。また、その姿勢を「安息のポーズ」とみて、類例を「六世紀半ば～八世紀半ばに存在した突厥の石像群」に求めた。アムール河流域の住民こそがオホーツク文化の担い手であり、牙製婦人像も彼らの手で直接持ち込まれた可能性を考えている。

1977年に北海道大学において開催されたシンポジウム「オホーツク文化の諸問題」においても、何人かの発表者によって牙製婦人像に言及されている（大井編1982）。菊地俊彦は、オホーツク文化の精神文化を特徴づける遺物として牙製婦人像を取り上げ、「何のために彫られたのか」「なぜ女性像だけが作られたのか」と問題提起した（p.62）。大塚は、牙製婦人像をシャーマンと結びつける自説を展開している（p.131）。サルモニー報告資料に加えてシベリア（トゥーバ地方）の木偶との類似を指摘し、香深井 A 遺跡におけるクマ彫像とのポーズの共通性から人とクマの一体化がみられるという。さらに浜中2遺跡をキャンプサイトとみるかベースキャンプとみるかについての議論の中で、牙製婦人像の存在が注意された⁽⁵⁾（p.142）。これに対して大井晴男は、牙製婦人像の出土状態や機能が明らかではないことから、牙製婦人像の存在は必ずしもベースキャンプの証拠にならないと答えている（p.144）。

1978（昭和53）年、菊池はオホーツク文化の起源をめぐる論考の中で、牙製婦人像を取り上げた（菊池1978）。「満州ツングースおよび北東シベリアの諸民族」の衣装との関連を指摘する一方で、シベリアのシャーマンが女性に限られないことから、牙製婦人像はシャーマンではなく、「オホーツク文化の女性の通常の衣装と姿態」を表現したと考えた。

2-3 1980年代以降

1990年代以降に道北部で何度かにわたり行われてきた学術的な調査や、2000年代に入って道東部で行われた史跡整備に伴う調査などにより、各地でのオホーツク文化に関わる調査成果の蓄積は著しい

が、牙製婦人像の出土例はあまり増えていない。

前田潮・内山幸子（2001）は、1990年に浜中2遺跡の発掘調査で出土した資料を再報告し、下半身に四足獣を表現するという際立った特徴に注目した。「牙製婦人像と熊の彫刻の存在を、熊祭りを含む熊に関する狩猟儀礼中に見られる女性と熊との特殊な神話的關係によって説明」したL.S.ワシリエフスキーの所論⁽⁶⁾を紹介し、この四足獣がクマである「状況証拠」とし、子熊飼育との関連を考えた。マッコウクジラ歯牙の流通についても考察し、起源論については、大塚と北構の説を紹介したうえで、北構説により客観性が認められると述べている。

これと同年に北構（2001）は、弁天島遺跡で出土した資料を紹介した。牙製婦人像の起源について、「中国で発達した古代佛教文化の主要な一属性である佛像の遠い流れ」であり、「金銅像または木像などが歯鯨の大形歯牙を素材とする換骨奪胎のメタモルフォーゼ」したとする考えを示している。源流を中国に求める点は1974年論文と変わらないが、祖型が杯をもつ婦人から仏像に変化している。

高島孝宗（2003）は、オホーツク文化の信仰と儀礼を論じた中で、牙製婦人像も取り上げている。大塚と北構の見解を紹介し、牙製婦人像は「シャーマニズム的世界観を背景に大陸から伝えられたもの」としている。菊池（2004）は、牙製婦人像について、「ニヴフ民族の女性であろう」と述べており、シャーマンではなく普通の女性の像だとする意見は変わっていない。ただ、その関心は主に素材としてのセイウチ歯牙の流通に向けられている。高島（2005）は、オホーツク文化の威信財について論じる中で、牙製婦人像を非実用品かつ自製品だとして、クマ意匠遺物などとともに「共同体の祭祀に用いられる品であり個人の所有物ではない」と考えた。

2-4 サルモニー報告資料について

A・サルモニー（ザルモニー）や、Я・А・シェルによって紹介され、突厥の「石人」（石製の人物像）

との関連が想定されてきた「南部／北部モンゴリア」出土資料（本論の図2-6）は、長年にわたって北海道のオホーツク文化研究者の注目を集めてきた。すでにみたように、大塚や北構はこの資料を主な根拠として、突厥を起点とするオホーツク文化への伝播過程を推測していた。その後も、オホーツク文化の牙製婦人像の「原彫像」（前田・内山2001）の可能性が指摘されるなど、牙製婦人像の系譜上で重要な位置づけを与えられている。

この背景には、オホーツク文化の担い手についての議論がある。アムール河流域に居住した黒水靺鞨こそがオホーツク文化の担い手ではないかとする考えは、先にみた1975年の『ドルメン』誌の座談会でも加藤晋平によって述べられている（大塚他1975、pp.73-84）。靺鞨文化の遺跡から出土する帯金具などは、トルコ系の遊牧民である突厥の影響を受けた可能性が高いとされる。一方、ユーラシア大陸には「石人」と呼ばれる石製人物像が広く分布し、やはり突厥文化との関わりが想定されている。したがって、オホーツク文化の牙製婦人像とよく似た婦人像がモンゴル方面で出土し、それが突厥の石人と何らかの関わりがあったとすれば、オホーツク文化の系譜を探る上で極めて重要な手がかりとなると考えられたわけである。

この資料の出土地については、これまで北部モンゴリア（大塚1968）⁽⁷⁾、南部モンゴリア（北構1974）、モンゴル地方（宇田川1988）、モンゴル（前田・内山2001）などと紹介されてきた。しかし、以下の検討によってこの出土地推定には根拠が乏しいことを示す。

問題の資料は、1940年のサルモニーによる論文（Salmony 1940）に写真が掲載された（図2-6a）。所蔵はニューヨークのDirk Fochコレクションとされている⁽⁸⁾。その後、1966年にシェルの著作（III ep 1966）にサルモニー論文を引用元としてスケッチが掲載された（6b）。シェルは出土地を北モンゴリアとしているが、サルモニー論文においてインチ単位

で示されたサイズをそのままセンチ表記にするなどの誤りがある。したがってシェルがこの資料を実見していたとは考えにくく、図はサルモニー論文の写真をもとに描いたものだろう。

日本では、大塚和義（同前）がシェル論文に拠ってこの資料をいち早く紹介し、牙製婦人像との関連に注目した。1974年には北構保男によってサルモニー論文の抄訳が示された。北構は、後にサルモニー論文の全訳も発表している（サルモニー2001）。

シェルによって北モンゴリア出土とされたこの資料を、大塚がオホーツク文化の牙製婦人像と結びつけた点は卓見であったといえよう。しかし、その後の研究において、サルモニーやシェルによる出土地の記載を引きずり続けた点には問題があった。

サルモニー論文は、ユーラシアに広く分布する石人について論じたもので、当該資料は、中国からの影響を論じる際の根拠として提示されたものである。写真には、“Southern Mongolia, VII—early VIII century”というキャプションが付けられている。しかし、古美術商を通じて入手した個人コレクションの資料に確実な来歴情報があつたと考えにくい。資料の出土地が不明であったことは、サルモニー論文の以下の記述からも明らかである。

（前略）やがて発掘され、その秘密の発見地についての言及無しに、極東の高度に組織化された美術取引の網にかかったのである⁽⁹⁾。（p.14, l.17-20）⁽¹⁰⁾

それでは、写真のキャプションにある Southern Mongolia という記載はどんな根拠によるのだろうか。サルモニーは、この牙製人形を殷の玉製品や西周の青銅製品と比較した後、年代を決定する資料として、ラドロフによってモンゴル（Mongolia）で発掘された石製レリーフ（Salmony *ibid*: Fig.8）を取り上げている。このレリーフは、モンゴル国中央部のオンギン川沿いに位置する突厥の王墓で見つかったものである（Radlof 1892）。レリーフには、

中央の男性の両側に、尖った帽子をかぶり、片手にカップをもった女性二人が描かれている。この頭部のかぶり物の類似を手掛かりにして、サルモニーは、牙製人形が「突厥人によって7世紀か8世紀前半に葬送用の小像として作られた」と推測したのである。

トルコ系の製作者は、中国の国境近くに住んでいたために、漢代を通じてよく分かっていない用法や素材で残存していたシンボルを借用することができたと考えることができる。(p.14, l.9-11)¹¹⁾

葬送用の小像として、この歯製の *baba* [女性] は中国との国境近くか、ことによっては国境を越えた墓に入れられ(後略)(p.14, l.15-17)¹²⁾

以上の引用部分における記述から、サルモニーが製作者として(7~8世紀頃の)中国国境付近に住んでいたトルコ系民族を想定していたことは明らかである。石人像の起源に中国からの影響を考えるにあたって、China → Southern Mongolia → Mongolia という関係を考えたのが、サルモニー論文の骨子であり、中国とモンゴルとをつなぐ「ミッシングリンク」の役割を背負わされたのが、問題の牙製像であった。逆に言えば、そのような系統関係の存在を前提として、Southern Mongolia という製作地が導き出されたのである。

注意しておきたいのは、Southern Mongolia すなわち南モンゴリア¹³⁾ という語句の指す対象である。英語の Mongolia には、現代のモンゴル国を指す場合とモンゴル高原全体(モンゴル国と中国内蒙古自治区)を指す場合とがある。後者の用法の場合、Southern Mongolia はその南部、現在の行政区分という中国内蒙古自治区を指すことになる。上でみたように、サルモニー論文の Southern Mongolia は、中国国境の付近ないし内側のトルコ系住民の居住地域を指しているから、現在の中国内蒙古自治区に相当する地域を指すと解するのが妥当であろう。

以上の検討から、サルモニーは Dirk Foch コレクション中の牙製人形が南モンゴリア(現在の中国内蒙古自治区に相当)出土だと考えていたこと、その考えが「中国とモンゴルをつなぐ地域」という推測に基づくもので、確実な根拠をもたないことを示した。この論文が発表された1940年は米村・北構論文が発表された同じ年であるから、日本国内の研究者にも牙製婦人像はあまり知られていなかった。東洋美術の研究者であるサルモニーがオホーツク文化の牙製婦人像を知らなかったのは当然である。また、海外文献の入手が困難な時代においては、サルモニーとシェルの論文の内容を十分に比較検討することは難しかったと思われる。しかし、今日の視点でこの出土地不明の資料を改めて評価するとすれば、その発見地については、類似した資料(牙製婦人像)が発見されている北海道周辺だと推測するのが妥当であろう。つまり、サルモニー報告資料はオホーツク文化の牙製婦人像そのものである可能性が高く、北海道ないしその周辺で採集された資料が古美術市場に流出したものと推測される。

サルモニー報告資料がモンゴリア出土であると考えられる根拠がないとすれば、この資料をオホーツク文化の牙製婦人像の「原彫像」と推測する根拠は失われ、牙製婦人像の起源について突厥の石人を想定する積極的な根拠もなくなったといえる。ユーラシア大陸に広く分布する石人を検討した林俊雄によれば、石人は石製で「高さ40~50cmのものから2mを越すものまで」あり、基本的に埋葬施設に伴う(林2005)。これに対してオホーツク文化の婦人像は、牙製で高さ15cm未満、副葬例はない。素材、大きさ、出土のコンテキストが全く異なっており、両者をあえて関連づける必然性は薄い。

2-5 小活

牙製婦人像に関わる研究史を概観した。

1950年代までは、牙製婦人像が認識されるようになった時期である。この時期に扱われた資料はい

ずれも出土のコンテクストが明らかではなく、すでに逸失していたものもあったが、オホーツク文化に伴う遺物という認識は形成されていた。

1960～70年代は牙製婦人像の研究がもっとも活発だった時期である。モヨロ貝塚やオンネモト遺跡における発掘調査での出土例が報告された。オホーツク文化の担い手について、黒水鞆靴やギリヤーク(ニブフ)を想定する意見が出されていた当時の研究状況を背景として、牙製婦人像の起源についても、大陸文化との関連が想定された。牙製婦人像の性格については、シャーマニズムとの関連を想定する見解が有力であったが、異論もあった。

1980年代以降の牙製婦人像研究は、新資料に乏しかったためもあり、やや停滞した状況にあったといえる。浜中2遺跡の特異な出土例によって牙製婦人像とクマ儀礼との関連が改めて注目された。素材の流通という視点からの議論が行われたが、既報告資料の見直しにまでは及んでいない。

これまでの牙製婦人像の起源論においては、海外の研究者が紹介した「北/南モンゴリア」出土とされる資料が重要な役割を果たしていた。しかし初出であるサルモニー論文を再検討し、この資料をモンゴリア(現在のモンゴル国ないし中国内蒙古自治区)出土とみなす根拠がないことを示した。

3 資料

3-1 資料について

これまでに知られている牙製婦人像の類例を概観する。道北部と道東部の遺跡から出土している(図1・表1)。前章での検討にしたがい、サルモニー報告資料は「出土地不明」として扱う。素材は重要な属性であるが、第4章で論じるため、ここでは扱わない。以下の記載にあたって、今回実物を直接観察できたのはモヨロ貝塚出土資料のみであり、他は報告者の記載と実測図・写真に基づいている。

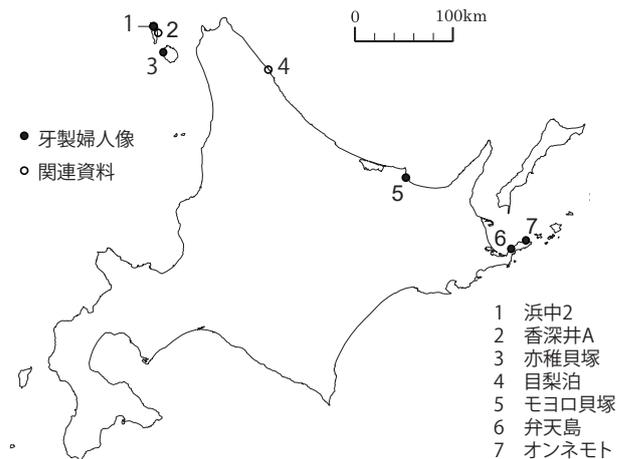


図1 牙製婦人像・関連資料出土遺跡

3-2 道北部の資料(図2)

道北部では、日本海北部の利尻礼文両島から5点の資料が出土している。採集資料が多く、出土状況が明らかなのは、浜中2遺跡出土資料のみである。利尻島の1点以外は礼文島北岸の船泊湾沿岸、特に中央部の浜中付近に集中している。オホーツク文化の拠点的な集落があったと考えられている東岸の香深井遺跡周近では出土していない。

利尻島：亦稚貝塚出土資料(図2-1)

亦稚(マタワッカ)貝塚は、利尻島西岸の杓形の集落中心部に位置する。この資料は発見後まもなく紛失したが、三方向からの略図が示されている(坪井1901)。添え書きによれば、「高サ曲尺二寸八分 重さ十六匁 面側の黒点は浅き凹窩なり 色は古き骨又は歯牙の如くにて淡褐色 滑澤あり 時維明治三十三年七月三十日午後三時 杓形マタワッカに於て藤井秀指揮の下に人夫某之を掘出し過て右肘を傷く」とある。この記述によれば、発掘時に欠損した右肘以外はほぼ完形だったらしい。高さ8.5cm、重さ60gということになる。頭は帽子または頭巾をかぶったような形態で、側縁には列点が施される。乳房はやや膨らみ、両手は腰の前で重ねられている。下半身が広がって安定した坐像であり、足の表現はみられない。

表1 牙製婦人像と関連資料の出土遺跡

図番号	自治体	遺跡名	発見年	初出	大塚 1968	北構	前田他 2001	
図 2-1	利尻町	亦稚貝塚	1900	坪井 1901	図 1-4	A	1974 図版 1	第 2 図 -4
図 2-2	礼文町	浜中付近	不明	大川 1950	図 1-3	A	1974 図版 2	第 2 図 -1
図 2-3	礼文町	神崎小学校	1952	大塚 1968	図 1-1	A	1974 図版 3	第 2 図 -2
図 2-4	礼文町	神崎小学校	1952	大塚 1968	図 1-2	B	1974 図版 4	第 2 図 -3
図 2-5	礼文町	浜中 2	1990	礼文町教委 1992	—	—	2001 図版 11	第 1 図
図 2-6	不明	不明	不明	Salmony 1940	図 9	—	1974 図版 10	第 2 図 -5
図 3-7	網走市	モヨロ貝塚付近	1939	米村・北構 1940	図 1-5	B	1974 図版 5	第 2 図 -6
図 3-8	網走市	モヨロ貝塚	1948	駒井・佐藤 1964	図 1-6	B	1974 図版 6	第 2 図 -7
図 3-9	根室市	弁天島	不明	米村・北構 1940	図 3	—	1974 図版 8	第 2 図 -8
図 3-10	根室市	弁天島	1994	北構 2001	—	—	2001 図版 12	—
図 3-11	根室市	オンネモト	1966	北構・岩崎 1967	図 4 左	—	1974 図版 9	第 2 図 -9
(図 4-1)	サハリン	本斗町南浜二丁目貝塚	1933	木村 1934	図 1-8	C	—	第 2 図 -11
(図 4-2)	礼文町	香深井 A	1968 ~ 72	大場・大井編 1976	—	—	—	—
(図 4-3)	礼文町	香深井 A	1968 ~ 72	大場・大井編 1976	—	—	—	—
(図 4-4)	礼文町	香深井 A	1968 ~ 72	大場・大井編 1981	—	—	—	—
(図 4-5)	礼文町	香深井 A	1968 ~ 72	大場・大井編 1981	—	—	—	—
(図 4-7)	枝幸町	目梨泊	1990 ~ 92	枝幸町教委 1994	—	—	2003 第 1 図	—
(図 4-8)	網走市	モヨロ貝塚	2003	網走市教委 2009	—	—	—	—
(図 4-9)	網走市	モヨロ貝塚	1948	駒井・佐藤 1964	図 1-7	—	1974 図版 7	第 2 図 -10
(図 4-10)	根室市	弁天島	1994	北構 2003	—	—	2003 第 2 図	—

亦稚貝塚ではその後も何度か小規模な調査が行われ、1977年にはバスターミナル工事に伴う発掘調査が行われた(利尻町教委1978)。出土した土器は、鈴谷式土器からオホーツク文化の貼付文期にまで及んでいる。したがって、牙製婦人像の帰属時期について絞り込むことは困難である。

礼文島：浜中付近採集資料 (図 2-2)

高さ13.8cmとこれまでに見つかった中で最大の資料である。頭頂部と顔面を欠損する以外はほぼ完全に残っており、首をやや右にかしげたポーズをとる。出土地点については、オションナイ(大川1950)、船泊砂丘第一遺跡(現在の浜中2遺跡付近を指す)から「西へ一丁余りの砂丘」(児玉・大場1952)などとされていたが、大塚(1968)が採集者への聞き取りによって重兵衛沢の砂丘と訂正した。これに従って重兵衛沢出土として引用されることが多いが、重兵衛沢左岸の重兵衛沢遺跡・重兵衛沢貝塚にはオホーツク文化の遺物がみられない⁽⁴⁾とする指摘もある(大井1976: p.8)。また大塚自身も、1977年のシンポジウム『オホーツク文化の諸問題』の席上で、「以前、私は重兵衛沢出土と報告しましたが、浜中から出たことがほぼ確実にになりました」

(大井編1982, p.131)と述べている。このように出土地の記載が二転三転した資料だが、これらの地点は全て船泊湾に面しており、いずれにせよ礼文島北部発見であることは間違いのないだろう。本稿では、浜中付近採集資料と呼んでおきたい。

顔面は菱形、厳密には上端が尖る扇形であり、中央に縦に欠損が入るが、吊り上った両目が残っている。大塚(同前)によれば、鼻の穴と口の痕跡も残っているという。欠損のせいもあるだろうが、異様な印象を与える容貌である。頭部の背面側中央には幅広の隆帯が垂れ下がる。隆帯の両側にはくの字・逆くの字の沈線が4本ずつ刻まれ、入れ子状のモチーフが描かれている。右腕はやや曲げて下半身に右手を置き、左腕は直角に曲げて左手を右肘に添えている。両手とも、きちんと5本の指が表現されている。胴体の前面には乳房があるが、膨らみはわずかである。後面には多数の細沈線からなるX字状の表現がみられ、何らかの衣装の一部を表したと考えられている。下半身は直線的に広がって裾付近では直立しており、側面観は等脚台形が長方形に乗ったような形である。下半身の後面に縦に14本の平行線が刻まれて、ひだ状の表現がされている。屈曲部のや

道北地域



1 亦稚貝塚、2 浜中付近、3・4 神崎小学校、5 浜中 2、6 出土地不明

図2 牙製婦人像の類例（道北および出土地不明）

や上から質感が異なっており、おそらく歯牙のセメント質であろう。断面図は示されていないが、歯髓腔が下端から最下部に横走する沈線の高さまで及んでいるという。

礼文島：神崎小学校採集資料1（図2-3）

神崎小学校は、礼文町北部の船泊湾のほぼ中央に位置する浜中の集落にある。牙製婦人像2点は、戦後の工事に伴って校庭北側から出土した（大塚同前）。神崎小学校のグラウンドは、1952（昭和27）年8月13日に竣工したから（礼文町立神崎小学校 n.d.）、おそらくその整備工事で出土したものであろう。こうした出土状況から、これらの資料の帰属時期は不明とせざるを得ない。なお大塚（同前）はこれらの資料の採集地点を「浜中遺跡」としているが、現在の登録上は「神崎遺跡」となっている¹⁵。本論では、これら2点の牙製婦人像を「神崎小学校採集資料」として、1・2の番号をつけて呼んでおく。

神崎小学校採集資料1は頭部から基部まで残っており、長さは9.2cmである。頭部・胸・下半身の前面が剥離しているが、乳房の突起があったことは分かる。また、肩の部分の割れ口から、腕は体の前に置かれていたと推測されている。首の付け根にわずかな浮き彫りがあり、鎖骨ないし衣服の表現とされている。頭部の前面は完全に欠損しているが、頭部を背面からみると菱形を呈し、7重の菱形の沈線が刻まれている。背中には、両肩を結ぶ横線と弧状の縦線2本から成るπ字状の浮線が施され、さらにその中央部には斜格子上の細沈線が刻まれている。これは、下半身の表現とともに、衣類を表したものであろう。ウエストは強くくびれており、下半身はパニエ状¹⁶に膨らんでいる。後面にはひだ状の表現がみられるが、ただ縦線を刻むのではなく、断面が半円状になるように立体的に彫り込んでいる。底面は平らで歯髓腔はみられないという。

礼文島：神崎小学校採集資料2（図2-4）

神崎小学校採集資料2は頭部と両腕を欠損しており、残存長7.6cmである。大塚（同前）によれば、

欠損は発見時のものらしい。上半身は板状で、乳房はわずかに膨らむ。腰の前面に両手が残存しており、両手を重ねずにそれぞれ腰（脇腹）に当てていたことがわかる。両手とも5本の指が表現されている。下半身はやや膨らむが、腰の屈曲部はゆるやかで、全体に細長いプロポーションである。背面に彫刻は施されていない。底面は円形で平坦に整えられ、歯髓腔は腰の付近まで及んでいるという。

礼文島：浜中2遺跡出土資料（図2-5）

浜中2遺跡は船泊湾のほぼ中央部の砂丘上に位置し、幾度にもわたって発掘調査されている。厚い魚骨層が残され、竪穴住居址や墓も見つかっているオホーツク文化の代表的な遺跡の一つである。

牙製婦人像は1990年の発掘調査で出土し、上半身部分が報告されたが、その後の整理作業の中で同一個体の下半身部分が新たに検出されたものである（礼文町教委1992、前田・内山2001）。上半身と下半身は厳密には接合していないが、高さ6.2cmに復元されている。上半身の残存部分は頭から右の上腕部にかけて、下半身の残存部分は腰から下の中央から左にかけてである。頭部は被熱により黒色化しており、右腕の割れ口は磨かれているという。

頭部は尖り、顔面は扁平だが、目・鼻・口が表現されている。頭部背面側には弧状の刻線が平行して左右に5本ずつ刻まれる。胸はわずかに膨らんでいる。表面は平滑で、衣類の表現とみられる彫刻はない。この資料の際立った特徴は、下半身の左前部に表現された四足獣である。顔面を欠損しており、割れ口は摩耗している。前田はこの彫刻が子熊を表した可能性を指摘している。オホーツク文化におけるクマ飼育の有無やクマ儀礼の問題とも関連して、極めて重要な資料である。

素材については次章で詳しく検討するが、内山（同前）によってマッコウクジラの下顎歯だと推測されている。腕や動物意匠、裾の外側にセメント質がみられ、それ以外は象牙質だという。

出土層位と所属時期については、前田（同前）が

詳細な検討を行っている。上半身・下半身ともにA-6区の出土で、上半身は14層（暗褐色砂層）上面から出土し、下半身は同区の10層（獣骨を含む魚骨層）のサンプル中に含まれていた。10層は14層の直上を覆うことから、両者は同一層位からの出土とみてよい。10層・14層はともに「沈線文期の層」とされている。報告書にはこれらの層から出土した土器が掲載されていないため十分に検討することができないが、発掘者の認定に従って、沈線文期に帰属するものと考えておく。

礼文島：元地遺跡出土資料

元地遺跡は、礼文島の南西岸に位置する遺跡であり、1970・71年に北海道大学北方文化研究施設によって発掘調査が行われている。オホーツク土器と擦文土器の接触様式である元地式土器のタイプサイトとして知られるが、オホーツク文化期の堅穴住居と貝塚が検出されている（大井1972）。

1977年のシンポジウム『オホーツク文化の諸問題』において、大井晴男が「こわれていますけどおそらく牙製婦人像だと思われるものを、貝層中で発見しております」と述べている（大井編1982: p.144）。しかし、元地遺跡の発掘調査は未報告であり、この資料についてはこれ以上の情報がないため、本論では考察の対象としない。

3-3 道東地域の資料（図3）

道東地域からは、4点の資料が出土している。2点が網走市モヨロ貝塚、2点が根室市弁天島遺跡と、いずれも拠点的な集落で見つかっている。

網走市：モヨロ貝塚付近採集資料（図3-7）

モヨロ貝塚は網走川左岸に位置するオホーツク文化を代表する集落遺跡である。本資料は、1939（昭和14）年にモヨロ貝塚付近で住民が拾ったものである（米村・北構1940）。頭部と右手を欠損しており、残存長6cmである。乳房ははっきり隆起する。左手は腹の前に置かれ、指は5本ある。首の付け根にはV字形、背面にはへにHの字を組み合わせた

ような浮彫が施され、衣類の表現であろう。下半身はパニエ状に膨らむ。下面は平らで、歯髄腔がみられるという。下半身の右側、右腕の欠損部分の下方には彫刻がある。「何か手に所持してゐた」と考えられ（米村・北構同前）、容器（大塚1968）や動物意匠（前田・内山2001）が想定されている。

網走市：モヨロ貝塚出土資料（図3-8）

昭和23（1948）年のモヨロ貝塚調査団による第2次調査において出土したもので、頭部と両腕を欠損する人物像である（駒井・佐藤1964、高橋2021）。高さ5.4cm、幅4.1cm、厚さ3.2cm、重さ30.5gを測る。表面は平滑であり、衣類の表現はみられない。乳房は小突起で表現されており、右側のみ残存している。下半身との境は明瞭に屈曲するが、その直上の腰部にはやや突出した欠損部分があり、両手が添えられていた可能性が高い。左半身の前面部は大きく欠損しており、左の乳房も残存していない。この割れ口は摩耗している。下半身はパニエ状にふくらみ、前面側がやや平坦な面となっている。下端はまっすぐに切断され、平らな面に安定して置ける。中央には髄腔が深く入り込んでおり、腰より上まで達している。底面方向から見ると、象牙質とセメント質の境が明瞭であり、象牙質には同心円状の構造がみえる。

上端の割れ口が風化していることと頭部が見つからなかったことから、廃棄時にはすでに破損していたと考えられる。素材の強度からみて相当に強い衝撃が加わったと考えられ、意図的な頭部の折り取りがあった可能性が高い。

この資料は10号堅穴出土の西壁外貝層の上から出土した¹⁷⁾（駒井1964）。この貝層からは、刻文期の土器口縁部破片多数が出土したが、出土した完形土器は沈線文期前半に相当する。貝層上からの発見であることを考えると、牙製婦人像は沈線文期に位置づけられる可能性が高い。

根室市：弁天島遺跡付近採集資料（図3-9）

弁天島は根室湾の北西に浮かぶ東西400m、南北150mの島で、オホーツク文化の堅穴住居址や貝塚

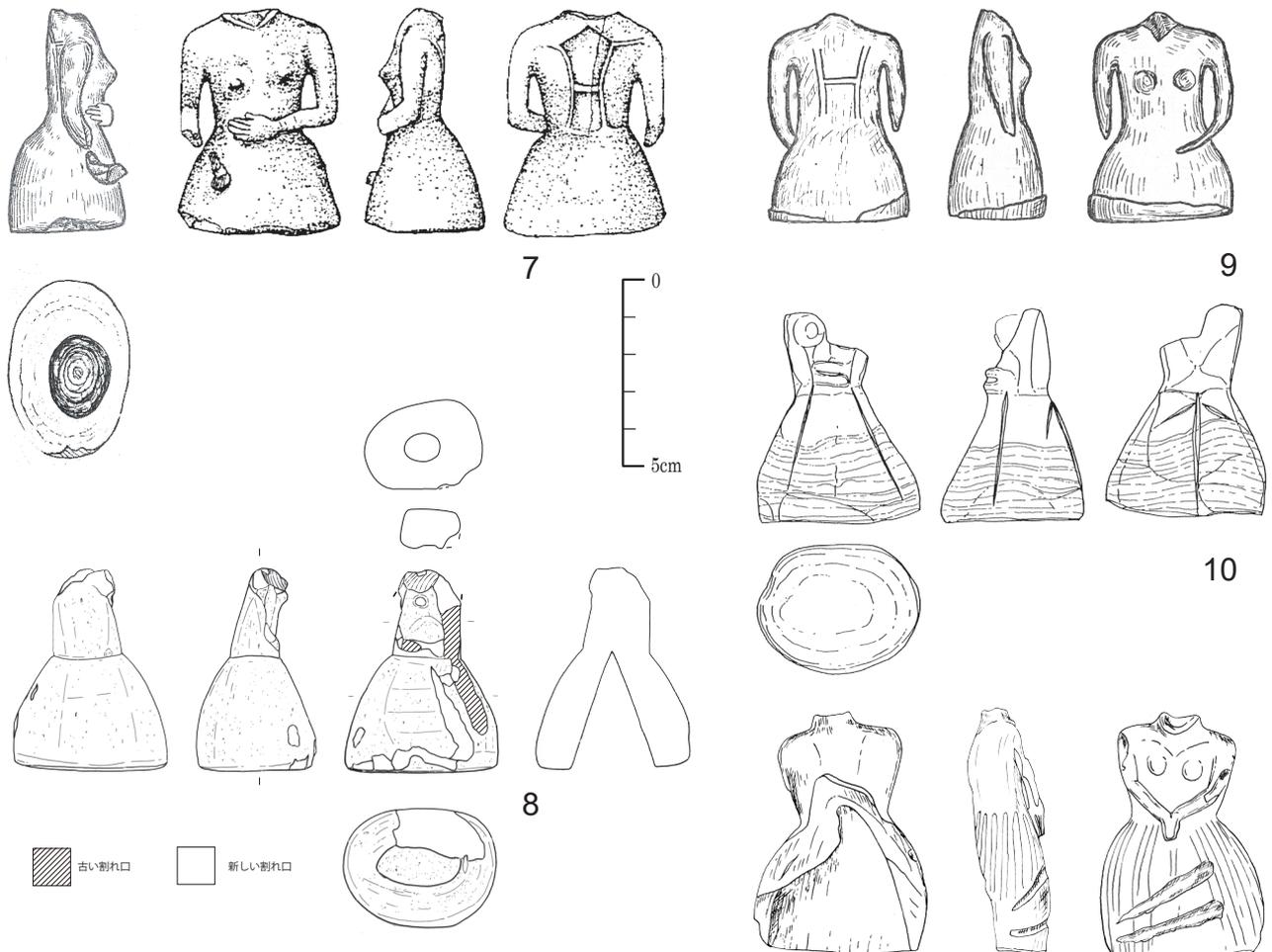
が残されている。明治初期のJ. ミルンによる調査以来、繰り返し発掘調査されてきた。

この牙製婦人像は、弁天島の灯台職員が波打ち際で拾得したが、1940年に報告された段階ですでに逸失していた(米村・北構同前)。首と右手を欠損し、残存長は約5.6cmとされる。正確な実測図ではなくスケッチである点に注意が必要だが、乳房ははっきりと隆起していたらしい。背中には、H字の浮彫が施されている。下半身はパニエ状に膨らむ。裾の近くには素材の質感の違いが表現されており、象牙質とセメント質の境だった可能性がある。

根室市：弁天島遺跡出土資料 (図 3-10)

1994年に行われた弁天島遺跡の発掘調査で、7号堅穴の床面から出土した(北構2001)。頭部と左胸を欠損し、残存長は約5.5cm。右の乳房は明瞭に隆起する。腰の前に二列の突起がみられるが、これは左右の手ないし腕を表現したものであろう。背面には彫刻等はみられない。腰ははっきりとくびれ、下半身はやや直線的に広がる。正面の左右に2本の刻線が縦に刻まれており、背面側では、縦線の両側に斜線を組み合わせて上向きの矢印状になっている。裾にかけて幅広く質感の違いの部分があり、セメント質だと考えられる。

7号堅穴の時期はオホーツク文化の「最盛期より



7 モヨロ貝塚付近、8 モヨロ貝塚、9・10 弁天島、11 オンネモト

図3 道東出土の牙製婦人像

終末期」で、3時期にわたる改築があり、牙製婦人像はそのうち最新段階の粘土貼床の端部から出土したとされている。つまりこの牙製婦人像は、オホーツク文化の終末期に帰属する¹⁸⁾。

根室市：オンネモト貝塚出土資料（図 3-11）

根室半島の北岸、オホーツク海に面したオンネモト湾に位置する遺跡である。1966・67年に東京教育大学による調査が行われた（東京教育大学文学部 1974）。

牙製婦人像は2号竪穴の北東に位置する貝塚から出土した。頭部を欠き、背面側を胴部から下半身に掛けて大きく欠損する。残存長6.5cm。プロポーションは、左に傾いている。乳房は隆起するが、顕著ではない。両手は、指先を下にして体の前で掌を合わせている。右腕から両手に掛けて、前面が欠損しているらしい。下半身の前面には大きなガジリ痕が二列入っている。下半身はパニエ状に膨らみ、側面にはひだ状の彫刻が浅く幅広の凹線で表現されている。後面にも続いていたと思われるが、欠損しているため不明である。欠損部からは、歯髄腔が腰の部分まで及んでいることがわかる。

出土層位は表土直下の獣骨層上面である。この貝塚は2号竪穴の構築後に形成されたと考えられている。2号竪穴は上下二枚の床面をもち、それぞれ藤本 e 群と d 群に対比されている。貝塚出土土器も、貼付文期の前半から後半にかけての資料を含んでいる。貝塚上面という出土位置を考慮して、貼付文期後半に位置づけておきたい。

3-4 出土地不明の資料（図 2-6）

サルモニー報告資料は、高さ $3\frac{5}{8}$ インチ(約9.2cm)で、全体に右前方に傾いたプロポーションである(Salmony 1940)。頭は尖り、帽子ないし頭巾をかぶっているような形である。目は沈線で描かれ、鼻は隆起している。乳房はわずかに隆起している。両手は腰の前で鉢状の容器をもっている。下半身はパニエ状に膨らむ。正面と左側面の写真しか示されて

いないので、背面の装飾の有無はわからない。ただ、サルモニーはこの資料を裸像として議論を進めており、衣類とみなされるような表現はなかったと考えられる。下半身の途中で素材の質感が異なっており、象牙質とセメント質の違いであろう。その境界線は腰の近くに位置している。

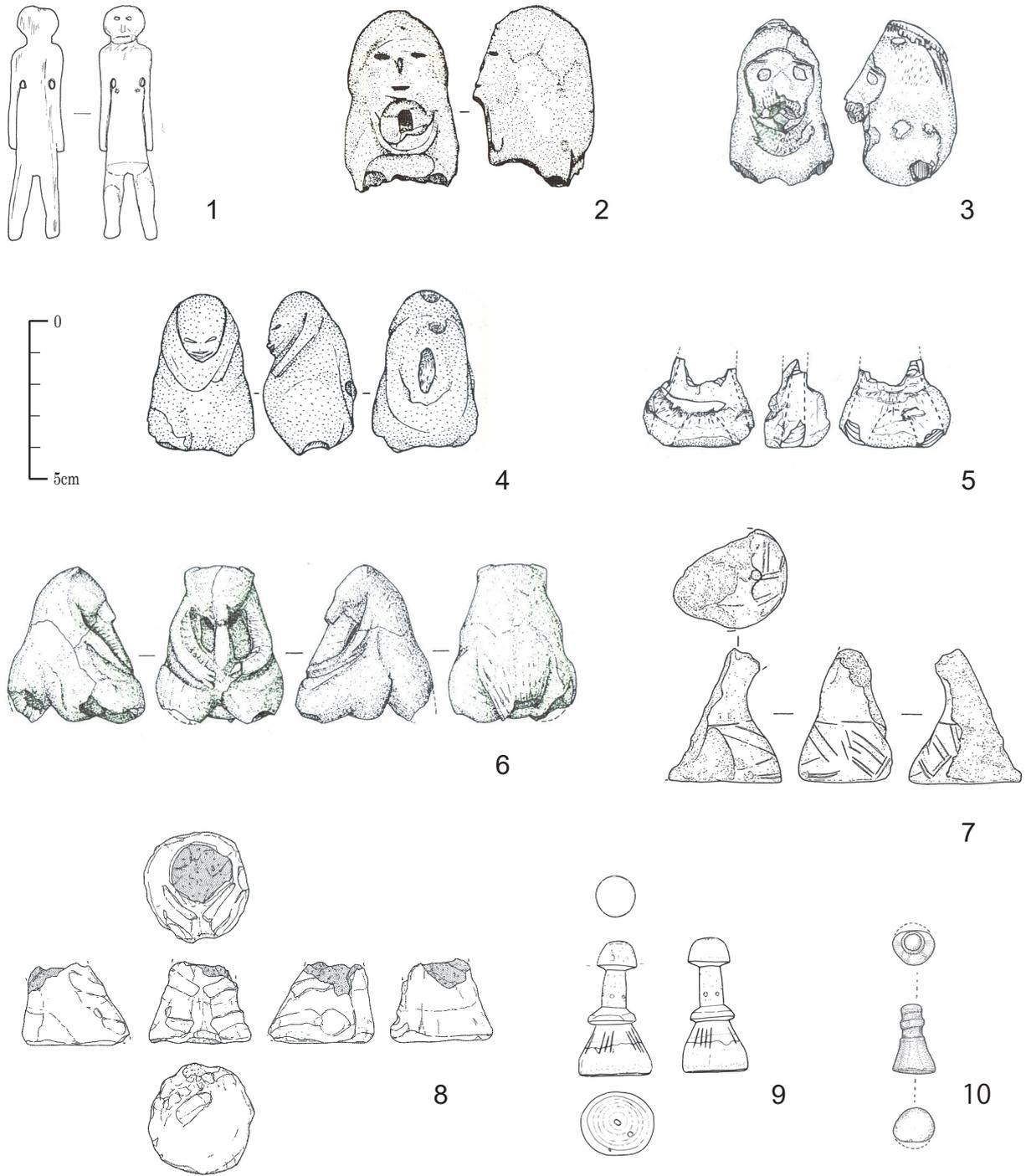
3-5 関連資料（図 4）

ここでは、牙製婦人像の関連資料とされるものを簡単に見ておきたい。

樺太本斗町南浜通二丁目出土資料（図4-1）は、長さ7.7cm、幅1.5cm、厚0.5cmと板状の鯨骨製で、四肢を表現した立像である（木村1984）。顔は「ドクロの面部」のようだとされ、目鼻口が表現されている。乳と陰部が隆起していることから、「女性の裸体」を表したものと報告されているが、プロポーションから女性らしさはあまり感じられない。両脇の部分に両面から穿孔されている。

骨偶は、遺跡のA地点の第一貝層から、鯨骨製の骨鋏・鳥骨製針入と伴って出土したという。第一貝層は、報告のB層に相当し、「三十糶一四十糶にして砂土を混じたる貝層より成りその中には獣骨魚骨等を多量に包含し土器は無文土器片刻紋土器片及捺形土器片を出土する」と述べられている。図示されている土器片は、刻文や型押文、円形刺突文をもつ。伴ったという骨角器も、オホーツク文化のものと考えて問題はない。大塚（1968）や前田（2001）はこの骨偶をオホーツク文化よりも新しい時期のものと考えているが、出土した土器は上層から下層に向けて古くなる傾向を示し、大きな攪乱を受けているとは考えにくい。したがって、この骨偶がオホーツク文化の十和田式期～刻文期に伴うものだった可能性を完全に否定することは難しいだろう。

礼文島香深井 A 遺跡（香深井1遺跡）は、礼文島東岸に位置するオホーツク文化の拠点的な集落遺跡である。北海道大学北方文化研究施設により、1968～72年に発掘調査が行われた（大場・大井編



1 本斗町南浜二丁目貝塚、2~5 香深井 A、6 オンコロマナイ貝塚
7 目梨泊、8・9 モヨロ貝塚、9 弁天島

図4 牙製婦人像の関連資料

1976・1981)。厚く堆積した魚骨層から大量の遺物が出土しているが、その中にネズミザメ（モウカザメ）の吻端骨で作られた骨偶がある。その大半が素材の形を生かしてクマを表現した座像である。前足の間に大きな魚（サケ？）のように見える何かを挟んでいる例が多い。香深井 A 遺跡ではほとんどが破損していたが、稚内市オンコロマナイ貝塚から、このポーズがよく分かる資料が出土している（図4-6）。類例は網走市モヨロ貝塚からも出土しているが、香深井 A 遺跡からの出土量は圧倒的に多い。

香深井 A 遺跡から出土した47例のサメ吻端骨製彫像のうち、4例が人を表現したともとして報告されている。しかし、これらはいずれも人の像であるかどうか不確実な資料である。図4-2は、目と口が彫られ、鼻は浮彫で表現されているようだが、顔の彫りは非常に浅い。手を前で組んでいる点が牙製婦人像と共通するという指摘もあるが（大井編1982）、手の部分の彫刻もそこまで明瞭ではない。3は両目と眉（？）が表現されており、人間の像として「ほぼ誤りない」と報告されている。しかし、破損している下部に鼻や口があったとすれば、かなり鼻面が長くなるため、確実とはいえないだろう。4はたしかに他の「クマ彫像」に比べると鼻面が短い、人の顔というよりは獣のようにも見える。

牙製婦人像との関連で最も注目されるのは、5である。やはりネズミザメの吻端骨を素材とするが、原形を留めないほど削り込まれ、下端は平坦になっている。この資料については、「スカート状の衣装をつけた人物像」だった可能性が指摘されている（大場・大井編1981：p.58）。つまり婦人像の腰のくびれからパニエ状の基部にかけての下半身の破片かもしれないということである。さらにこの資料には「浮彫状に削り残された」部分がある点も、浜中2遺跡出土資料（図2-5）との関連で注目される。出土層位は間層Ⅲ-Ⅳであり、出土土器からは刻文期前半に位置付けられるだろう⁹⁹。幅は3.5cmであり、大きさの点でも牙製婦

人像とあまり変わらない。しかし、顔や胸、手といった部分を欠くため、人物像と認定するための積極的な根拠に欠けている。

道北部の代表的なオホーツク文化遺跡の一つである枝幸町目梨泊遺跡から出土した土製品（図4-7）は、「婦人像と思われる土製品」として報告されたものである（枝幸町教委1994）。残存高は4.2cmである。牙製像と同様に全体に前かがみに湾曲していると考えると、右半身の脇から下半身にかけての部分が残っていることになる。下半身には沈線による装飾が施される。腰の部分を横線で区画し、その下に斜線をやや粗雑に施している。斜線は2本一組になっているらしく、鋸歯状のように見える部分もある。

この土製品はたしかに牙製婦人像の基部とサイズ・形状がよく似ている。目梨泊遺跡やホロベツ砂丘遺跡など枝幸町の遺跡では、骨角で作られることが多い動物意匠遺物が土製品として作られることが多く（高島2003）、この資料もそのような地域性のもとで製作された婦人像の可能性がある。

モヨロ貝塚出土土製品（図4-8）は、オホーツク文化刻文期の9c号堅穴床面から出土し、「いわゆる婦人像のスカートのような部分ともみられる」と報告された（網走市教委2009）。「正面に浅いケズリによって4本の沈線が施され」ているが、このような表現は牙製婦人像にはみられないもので、むしろクマ座像にみられる四肢の表現に近い。同じ9c号堅穴床面から出土したクマ座像土製品と比べると、全体に省略が進んだものではないだろうか。

モヨロ貝塚出土牙製品（図4-9）は、チェスのポーン状を呈する。高さ4.2cm、径は2.1～2.3cmである。前述した牙製婦人像と同じく、1948年の調査で出土したものである。出土位置は10号堅穴の床面であり、貼付文期前半のものである。上面がやや平坦な半球状の頭部が棒状の軸部で支えられ、基部はパニエ状にふくらむ。軸の根元には、つば状の張り出し部がある。軸の下方には、凹点が6個、器体を一周するように並ぶ。基部には3～4本一単位の縦の

刻線が4単位刻まれている。

報告では、この牙製品について牙製婦人像の「便化」の可能性が指摘されていた(駒井・佐藤1964)。大塚(同前)は、「頭に相当するふくらみ」と「スカート状の部分」に加え、点刻が乳房、つば状の張り出し部が組んだ両手を表した可能性を指摘している。北構(1974)は、婦人像とセットになる「男子の象徴彫刻」の可能性を示唆したが、やはり婦人像だと結論している。たしかにこの牙製品は、マッコウジラ歯牙という素材とふくらむ基部形態が、牙製婦人像と共通しているが、顔や手足、乳房などの表現を欠いているため、「人物像」「婦人像」だと断定することは難しい。

弁天島遺跡出土牙製品(図4-10)は、牙製婦人像(図3-10)と同じ7号堅穴の骨塚から出土したという。北構(2003)によって「樺太アイヌ人のもつ通称ニポポ(人形)に似ていなくもない」として紹介されたものである。モヨロ貝塚出土例とやや似たプローションだが、高さ2.2cmと半分程度の大きさであり、よりシンプルな作りである。

以上、牙製婦人像の関連資料を概観した。これらの関連資料について、①素材、②形態、③人物像としての要素、の3点から検討してみたい。樺太本斗町南浜通二丁目出土資料は、③人物像であることが確実な資料だが、①素材と②形態が大きく異なることから、同列に論じることは難しい。目梨泊出土土製品と香深井A遺跡骨製品は、牙製婦人像と共通する②形態をもつが、①素材が異なっており、③顔や手足、胸などの人物像(婦人像)と認定するための積極的根拠を欠く。これらの資料と牙製婦人像との関係については、残存状況の良好な資料が見いだされるまでは、判断を保留しておきたい。モヨロ貝塚出土の土製品については、人物像ではなくクマ座像との関連を考えるべきだろう。モヨロ貝塚と弁天島遺跡出土のポーン状牙製品は、牙製婦人像と①素材は同じ、②形態も共通点をもつが、③人物像と断定することは難しい。したがって、以下の考察におい

てはこれらの関連資料は対象としない。

3-6 小活

牙製婦人像としては、11点を確認することができた。北構による2001年の集成から20年を経ても増えていない。この間には相当な数のオホーツク文化の住居址や墓が調査・報告されているが、全く出土していない。これは単に希少であるというだけではなく、その使用や廃棄のあり方について、何らかの示唆を与えるものかもしれない。

出土状況が判明している資料についてみると、堅穴住居の床面が2点、貝層・魚骨層の上が3点である。墓に副葬された例や、遺構に伴うなど特殊なあり方を示す例はない。オホーツク文化の堅穴住居内では、奥壁に設けられた骨塚で儀礼が行われたと考えられているが、骨塚に伴った例も存在しない。やはりオホーツク文化を象徴する遺物とされる動物意匠遺物をみると、宇田川(2001)によって142例が集成されており、圧倒的に数が多い。また、道東部における出土状況を検討した角(2004)によると、床面と並んで骨塚からの出土例が多い。このように出土数と出土状況が全く異なっており、共伴した例もないことを考えると、牙製婦人像と動物意匠遺物を組み合わせるとオホーツク文化の「神概念」を復元しようとした大塚(1968)の構想には、やや無理があるのではないだろうか。

頭部の形態・装飾については、頭髪を表現したものとする考えと(米村・北構1940、菊池2004)、頭巾や帽子だとする考え(Salmony 1940、前田他2001など)がある。服装については、サルモニーが裸像とみたのに対して、日本の研究者の多くは背中や下半身にみられる表現から、着衣の人物だと考えている。ここでは、最も具体的な大塚(同前)による記述をみてみよう。頭の形態については、「髪を弁髪に結って、その束ねた髪を襟のはえぎわから頭上に折り返している」「削掛を束ねたもの」「帽子のような冠り物」の三つの可能性を挙げている

(p.28)。一つ目は、浜中付近採集資料にみられる頭部背面中央の隆帯について述べたものであり、北東アジアの遊牧民族との関係を想定したものだだろう。二番目は、アイヌの儀礼用冠を念頭に置いたものだと考えられる。三番目については、狩・漁撈のときにかぶると超自然的な力が与えられると信じられていたというアリユート族の樹皮製の円錐形帽子の例を挙げている。衣服の種類については、「うすものの衣装」(p.28)、背中の文様について「スカートの吊りバンド」(p.26)と述べ、さらにオロッコ(ウイльта)のシャーマンの衣装と比較している。

このように、大塚による議論では、牙製婦人像の頭髪や衣類の表現を、北方諸民族のシャーマンとの関連を意識して解釈している。菊池(1978)は、衣装は「裾広がりのワンピース」で、背面の浮彫は「満州ツングースおよび北東シベリアの諸民族の衣装に特徴的な、背面の刺繍を表現したもの」だと考えている。シャーマンではない女性の姿だとする点が異なるが、北方諸民族の姿を直接写したとする点では共通している。これに対して、北構(2001)のように仏像等からの変容を考える立場では、これらの表現は必ずしも製作者の姿を直接反映している必要はないことになる。一般論として、偶像からその製作者の風俗(髪型や衣類)を直接読み取ることは難しい²⁰。本論ではあくまで牙製婦人像そのものの変遷について考察することにした。

牙製婦人像は全て両腕を下ろした状態であり、手を挙げたり腕を横に広げたりするものはない。また、上腕が胴体と完全に一体化せず、脇の部分彫りぬいている。指がきちんと5本表現されている例が多いことも、写実的な印象を与えている。両手とも残るものは少ないが、腰の前で上下に重ねる例(図2-1)、左手を右ひじに置く例(2)、両手を腰の前にあてる例(4)、両手で容器を持つ例(6)、指先を下に向けて掌を合わせる例(図3-11)がある。別のものが組み合わさるものとして、前述した容器以外に、四足獣(図2-5)と不明彫刻(図3-7)がある。

4 素材

牙製婦人像の素材については、米村・北構(1940)がモヨロ貝塚付近採集資料をマッコウクジラ牙製とし、児玉・大場(1952)も浜中付近採集資料をマッコウクジラ牙製と考えた。これに対して、大川(1950)は浜中付近採集資料をセイウチ牙製だと報告したが、その具体的な根拠は示されていない。さらに大川は注の中で、モヨロ貝塚付近採集資料と弁天島採集資料についても、セイウチ牙製だった可能性を指摘している。このうち弁天島採集資料は1940年以前に逸失していたから、資料を実見しての判断ではない。モヨロ貝塚付近採集資料についても資料の観察所見は記されていない。したがって、これらの資料についてセイウチ牙製の可能性を考えたのは、浜中付近採集資料からの類推だったと思われる。ここで大川が亦稚貝塚出土資料に触れなかったのは、この注が「抹香鯨(?)の歯牙製」と疑問符を加えることに対する説明として付されたため、もともと「海獣牙製」としか報告されなかった亦稚例には言及する必要がなかったためである。

大塚(1968)は、牙製婦人像のうち、浜中付近採集資料、神崎小学校採集資料1、モヨロ貝塚採集資料についてセイウチ牙製だと述べている。その根拠としては、モヨロ貝塚採集資料について「マッコウクジラと記載されているが、形状から見てセイウチの牙らしい」と述べているのみである。しかしどのような「形状」にもとづいてこの資料をセイウチ牙製と推定したのか、説明はされていない²¹。北構(1974)は、牙製婦人像の「全てが同一種類の動物歯牙による彫像とすることにも、尚検討の余地がある」と述べた上で、オネモト遺跡出土例について、遺跡出土の標本とも比較した上で、マッコウクジラ歯牙として不自然ではないことを示した。一方で、セイウチ牙製の可能性のある資料として、浜中付近採集例とモヨロ貝塚採集例を挙げている。その根拠は、前者については明記されていないが、後者については「白色を帯び、やや軟質な素材」が、湧別川

西遺跡出土のセイウチ牙製とされる動物像に類似していることだという。しかし、湧別川西遺跡の動物像がセイウチ牙製であるかがまず問題となるし、象牙質の色調と質感の類似が、原材同定の根拠としようものなのかどうかについても検討しなくてはならない²²⁾。

内山は、現生マッコウクジラの歯牙のサイズや構造を示した上で、浜中2遺跡出土資料がマッコウクジラの下顎歯製だと同定した(前田・内山2001)。筆者も、東京大学所蔵のモヨロ貝塚発掘資料について、やはりマッコウクジラの下顎歯製だと考えた(高橋2021)。マッコウクジラは下顎に片側20～28本の湾曲した楕円錐形の歯をもつ。上顎歯は歯肉に埋没していて萌出することがないが、片側10～16本が生えている。上顎歯は下顎歯よりも小さいが、摩滅しないことから年齢査定にはより適しているとされる。これに対して、下顎歯はサイズが大きいため、彫刻の素材としてよりふさわしい。下顎歯の長さは平均で20cm(U.S. Fish & Wildlife Service n.d.)、最大で25cm以上(大隅1997)に達する場合もあるという。サイズの点では、13.8cmと最大の重兵衛沢例であっても、十分に製作可能であろう。

一般に歯はエナメル質・象牙質・セメント質から成る。象牙質が歯の主体を形成し、エナメル質が歯冠部を覆い、セメント質が歯根部をカバーする。ただし、マッコウクジラの場合は、セメント質が発達していてエナメル質の発達が弱い点の特徴である。エナメル質は先端にわずかしみられないため、下顎歯では摩耗して残っていない。上顎歯では先端付近にエナメル質が残存するが、前述したように歯肉に埋没しているためにセメント質に全体が覆われてしまう²³⁾。

セイウチ牙の特徴は、なんといっても最大1mに達するサイズにある。しかし、前述したように、これまでに知られている牙製婦人像には、セイウチ牙でなくては作れないほどの大きさの資料は存在しない。最大の重兵衛沢遺跡例でも15cmにも達せず、

下端部には歯髓腔が残っている。もしこの資料の素材がセイウチ牙だとすれば、数十センチの長さの象牙質部分を切り出すことが可能な長大な素材の、基部近くだけを使って製作したことになる。

オホーツク文化にセイウチ牙製品が存在する可能性を否定するものではないが、セイウチが自然分布しないオホーツク海沿岸域においてセイウチ牙製だと断定するためには、より確実な根拠が必要だと考える。セイウチ牙の組織・構造面における特徴は、特に雄の牙において断面形が整った楕円形にならずに周縁が波打つ点、象牙質に長い縦のクラックが入る点、象牙質が二層構造になっていて中心部に大理石状の骨象牙質²⁴⁾がみられる点などが挙げられる(U.S.Fish&Wildlife Service *ibid.*)。今後は、こうした特徴にもとづいて、確実にセイウチ牙を同定する必要があるだろう。

5 分類と編年

5-1 これまでの分類と編年

大塚(1968)は、偶像(牙製婦人像)を「時期的なうえから、また形態的に」、次のように分類した。Aグループは、「地域的分布が利尻・礼文両島に限定される」もので、「頭部を失なわず、ほぼ完全な形」であることも特徴だという。Bグループは、「いくらか小形になり、浮き彫りや線刻もすくなくなる傾向をしめし、また頭部が意図的に打ち欠かれているようである」「北海道のオホーツク海沿岸一帯に拡がっている」という。Aグループをオホーツク文化前半、Bグループを後半に編年している。さらに「頭部が丸く、平面的なことを特徴とする」Cグループも設定しているが、これはサハリン出土の1点のみで、A・Bよりも遅れる(オホーツク文化よりも新しい)時期のものだと考えている。したがって、オホーツク文化の偶像については、A・Bの二つのグループに分けたことになる(表1)。

この論文における大塚の記述では、分類基準とそれ以外の属性(欠損・分布・時期を含む)の説明が

混然となっており、相互の関係がやや分かりにくい。しかし、遺物の製作時の属性で分類した上で、それぞれのグループの特徴として、欠損の状態、地域差や時期差を述べていると考えておく。AグループとBグループの分類基準は、サイズの違いと装飾(浮彫や線刻)の多少ということになる。一方、1975年の『ドルメン』座談会における大塚の発言をみると、「比較的大形でかなりリアリティにとむ彫りのものが、古い時期つまり刻文期のものである可能性が強い。それから小形で非常に抽象化が進んだものは新しい時期である」と述べており(大塚他1977: p.72)、リアルからの抽象化というやや異なる表現で編年観が述べられている²⁵⁾。

前田(2001)は、大塚による分類を紹介した上で、浜中2遺跡出土資料が、大塚の分類や編年観に必ずしも当てはまらないことを指摘した²⁶⁾。浜中2遺跡資料が、道北出土で頭部を残すというAグループの特徴を持ちながら、小形でオホーツク文化の後半期(沈線文期)に属するという点を問題にしたわけである。その上で、大塚の分類基準のうちサイズの違いは、頭部の欠損状況によって印象が左右されたもので、AグループとBグループの間にサイズの違いはないと指摘した。頭部の欠損については、時期差ではなく地域的な習俗の違いとみなしている。AグループとBグループの間にサイズの違いがない点、また前者が古く後者が新しいという編年観に問題がある点は、前田の指摘する通りであろう。しかし、新たな分類案や牙製婦人像全体の編年案は提示されておらず、あくまで個別の資料について従来の分類・編年の枠組みの問題点を指摘するに留まっている。

5-2 編年案の提示

牙製婦人像の編年を行うにあたっては、10例程度と極めて限られた資料しかなく、かつ帰属時期に関する考古学的情報を欠く資料が多いという制約がある。このため通常行われるような型式の設定や編

年作業を行うことは困難である。個々の要素について分類し、変遷の順序を仮定し、その変遷観に基づいて個別の資料を位置づけるという方法を採用ことにしたい。

頭部、胴部、下半身の装飾を、次のように整理する。これらの装飾が施されるのは、基本的には背面側である(図5)。

頭部の形状とモチーフ

- a. 明瞭な菱形(夙形)で、入れ子状の図形
- b. 水滴形で、両側にカッコ状の刻線を重ねる
- c. 側縁に列点がめぐる
- p. 無文

胴部

- a. π 字形の浮線と、中央部に斜格子
- b. H字形の浮線
- c. 細沈線を重ねたX字形
- p. 無文

下半身の縦線

- a. 断面が半円形になる浮き彫り状
- b. 平行刻線を多数並べる
- c. 浅く幅広い凹線を並べる
- d. まばらな刻線
- p. 無文

衣類やかぶり物(帽子・頭巾)を具象的に表していた段階から、モチーフが崩れて表現が省略化される変化を想定している。これに基づいて、道東部と道北部の地域差を考慮しつつ、牙製婦人像の変化を3段階に分ける(図6)。

I段階

I段階とした資料は、頭部が角ばって入れ子状のモチーフを持ち、胴部に衣装に由来すると思われる表現をもつ。下半身には浮彫や刻線によるひだ状の

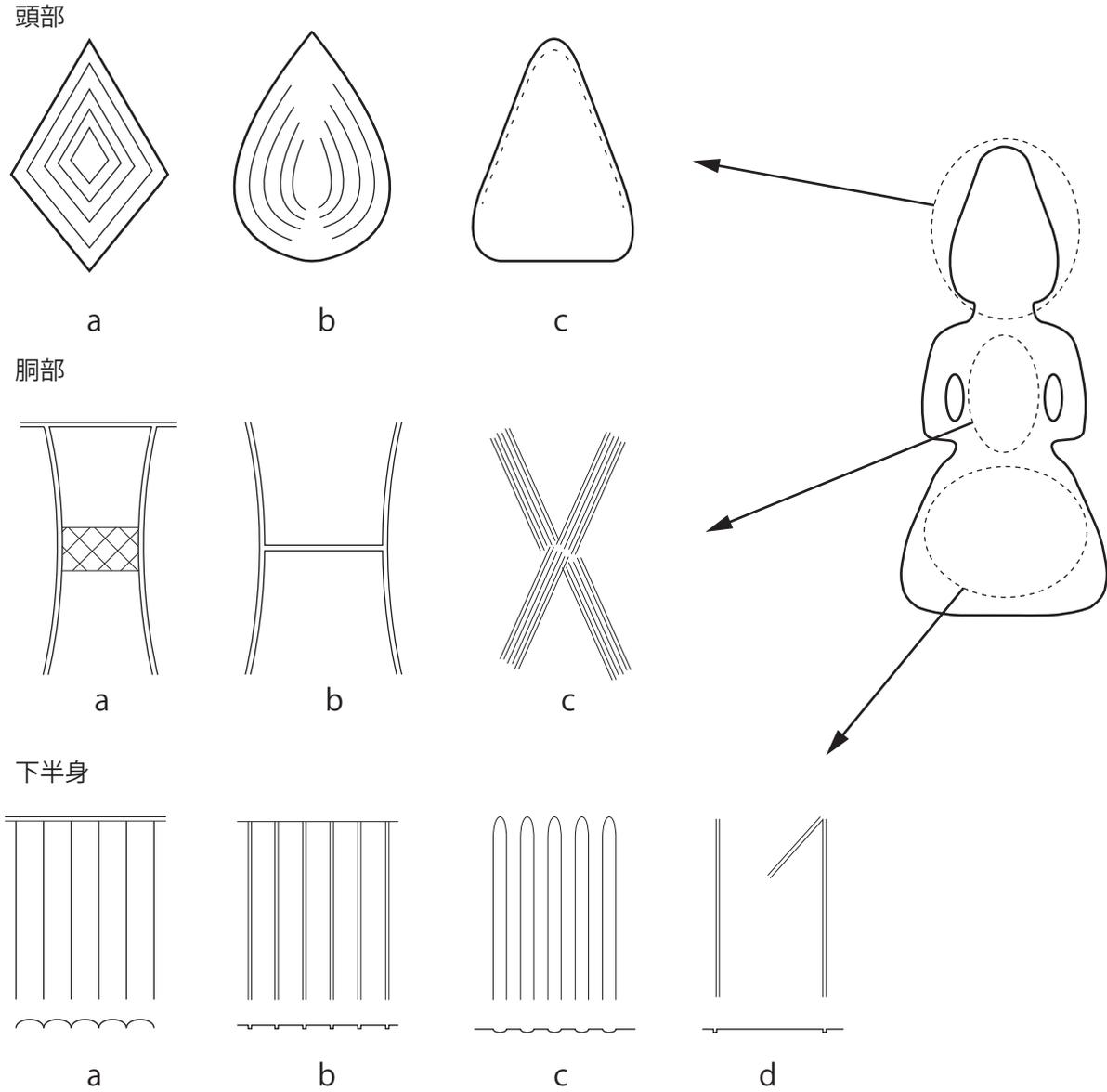


図5 牙製婦人像の分類基準

表2 牙製婦人像の段階区分

図番号	遺跡名	段階	頭部	胴部	下半身	大塚分類
図2-3	神崎小学校	I	a	a	a	A
図3-7	モヨロ貝塚付近	I	欠	b	p	B
図3-9	弁天島	I	欠	b	p	—
図2-2	重兵衛沢	I	a	c	b	A
図2-5	浜中2	II	b	p?	p	—
図3-8	モヨロ貝塚	II	欠	p	p	B
図2-1	亦稚貝塚	III	c	p	p	A
図3-11	オンネモト	III	欠	p	c	—
図3-10	弁天島	III	欠	p	d	—
図2-6	不明	不明	p?	p?	p?	—
図2-4	神崎小学校	不明	欠	p	p	B

道北
 道東

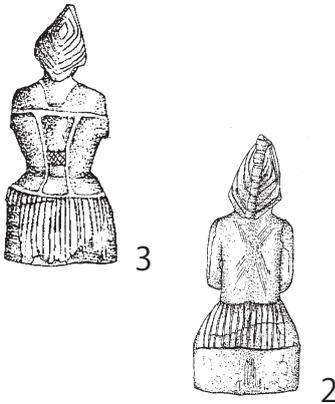
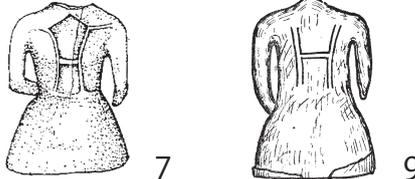
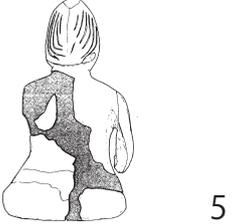
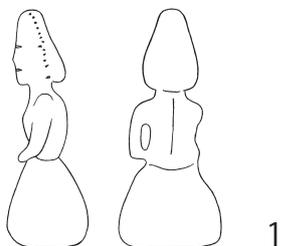
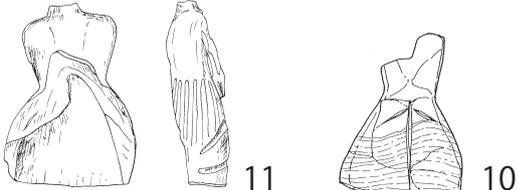
	道北部	道東部
I	 <p>3 2</p>	 <p>7 9</p> <p>(番号は図2・3と共通、縮尺不同) (下線は時期が分かる資料)</p>
II	 <p>5</p>	 <p>8</p>
III	 <p>1</p>	 <p>11 10</p>

図6 牙製婦人像の変遷

表現を持つ。おそらくさらに細分可能だと思われる。

神崎小学校採集資料1(図6-3)は、頭部・胴部・下半身のモチーフが古い様相を示すと考えた。整った形で、立体的に彫り込まれている。モヨロ貝塚付近採集資料(7)と弁天島採集資料(9)は道東部の資料で、下半身が無文であるが、背中には浮線による装飾をもつ。浜中付近採集資料(2)は、衣装の形状を立体的な浮彫で写しとったようなモチーフ

が、細沈線や沈線に置き換わっている。こうした点から、より新しい様相を示していると考えられる。

I段階は全て採集資料で、年代を与える根拠がない。ただし、オホーツク文化が道東部に本格的に進出するのは、刻文期以降とされており、モヨロ貝塚においても、十和田式期の土器はこれまでにわずか2点が確認されたのみである(熊木2009)。また、次にみるようにII段階が沈線文期に相当すると考え

ている。このため、I段階はおおむね刻文期に相当するとみておきたい。

II 段階

浜中2遺跡出土資料(5)は、I段階とした資料と比較すると、頭部の形と入れ子状のモチーフが崩れている。胴部と下半身は無文である。モヨロ貝塚出土資料(8)は、胴部と下半身が無文で頭部を欠いているため、本論の分類基準は適用できないが、沈線文期前半までに形成された貝層の直上から出土していることから、この段階に位置づけておく。

III 段階

亦稚貝塚出土資料(1)は、頭部の刻線が省略されて列点になったものだと考えて、この段階に位置づけた。スケッチである点に注意が必要であるが、頭部の形も隅丸三角形で崩れているように見える。胴部・下半身は無文である。

オンネモト遺跡出土資料(11)と弁天島遺跡出土資料(10)は、いずれもオホーツク文化の貼付文期後半に伴うと報告された。道東部ではこの段階になって下半身に装飾をもつ資料が現れるが、偶然の資料の偏りによるものか、わからない。下半身の表現は、浅い凹線によるものと刻線がまばらなものがある。

道東の2点の年代観から、III段階は貼付文期に相当すると考えられる。亦稚貝塚出土資料についても、同じ時期と考えておく。

以上、9点の資料について三段階の区分を試みた。背面の文様を中心に分類を行ったため、神崎小学校採集資料2(4)とサルモニー報告資料(6)については、どの段階に属するか不明とした。今回示した編年案では、大塚(1968)によってAグループ(1・2・3)とBグループ(7・8)とされた資料が、それぞれ複数の段階に分かれている。しかし、やはり大塚(同前・大塚他1975)によって指摘されていた、浮彫や線刻が少なくなる傾向、あるいはリアルから

の抽象化という方向性は、今回示した編年案でもある程度共通している。

6 おわりに

牙製婦人像に関わる研究史を整理し、資料を改めて概観した上で、新たな分類・編年案を示した。わずかな資料に基づいた立論ではあるが、停滞状況にある研究に一石を投じることができればと考える。

謝辞

東京大学考古学研究室所蔵資料の実見にあたっては、福田正宏准教授・石川岳彦助教のお世話になった。モンゴル・モンゴリアの呼称の実態については、畠山禎氏のご教示を受けた。末筆であるが、記して感謝したい。

[註]

- (1) 1933(昭和8)年夏に札幌で開催された『北海道原始文化展覧会』において、千島や樺太、北海道の資料が一堂に集められたことが契機だったという(米村1969)。
- (2) 採集地点については後述するように議論があるが、本稿では浜中付近採集資料とする。
- (3) 大塚は採集地点を浜中遺跡と呼んでいるが、本論では神崎小学校とする(詳しくは後述)。
- (4) 大塚(同前)とは異なり、本斗町南浜二丁目貝塚の資料を対象に含めていない。
- (5) この発言は司会者によるもので、東北地方の縄文時代晩期の大型遮光器土偶の事例が参照されている。シンポジウムの司会は、大場利夫・桜井清彦・吉崎昌一・林謙作が務めた。
- (6) 引用されているワシリエフスキー1978年論文は未見であるが、前田によれば、牙製婦人像を4つのタイプに分けており、「基本的に大塚分類と類似したもの」だという。
- (7) 大塚は1975年の座談会で「北部モンゴリア」としながらもサルモニー論文との齟齬にふれて「どちらかわからない」と発言したが(大塚他1975: p.72)、1977年のシンポジウムでは「南部モンゴリア」と述べている(大井編

- 1982: p.132)。
- (8) Dirk Foch (1886-1973) はオランダ領東インド諸島で生まれ、欧州と米国で活躍した音楽家である。彼のコレクションの行方については手掛かりがつかめていない。
- (9) 本文中に引用したサルモニー論文の和訳は、筆者自身による。サルモニー論文の全訳を提示した北構の学問的姿勢は高く評価されるが、中国の王朝名の翻訳などにやや問題がある。例えば、「シャン王朝」と訳された Shang date は殷時代とした方が日本の読者にはわかりやすい。Early Chou は「周初」ではなく西周、Late Chou は「周末期」ではなく東周（春秋戦国時代）とするのが妥当であろう。また「チャン」= Chan は遊牧国家の君主の称号である汗（ハン）のドイツ語表記である。
- (10) As a funerary statuette, this tooth-baba found its way into a grave near or even across the Chinese border where it was eventually exhumed and caught by the highly organized art-trade of the Far East, without reference to the place of clandestine discovery. (Salmony 1940: p.14, l.17-20)
- (11) It may be assumed that its Turkish maker lived near enough to the Chinese border to borrow the symbol which survived the Han period in some ill-investigated usage or material. (Salmony *ibid.* p.14, l.9-12)
- (12) 注 10 を参照。
- (13) 英語における Mongolia と同様に、日本語における「モンゴル」にも両義性がある。しかし、日本では「モンゴル」がモンゴル国を指すというイメージが強いため、モンゴル国と中国内蒙古自治区を合わせた範囲の総称として「モンゴリア」を使うことがある。大塚や北構による「北部／南部モンゴリア」という呼称は、この点において妥当である。ただし、その範囲を南北に区分する場合は「南モンゴリア」「北モンゴリア」とするのが一般的であるので、本文では基本的にこのように表記する。
- (14) 後年に重兵衛沢の右岸で発見・調査された重兵衛沢 2 遺跡でもオホーツク文化の遺物は出土していない（礼文町教委 1986）。
- (15) 1970 年には「神崎ウエンナイボ遺跡」として発掘・報告されたが、この時の調査ではオホーツク文化期の遺物は出土していない（松野他 1970）。
- (16) 牙製婦人像の下半身にみられる半球状にふくらんだ形態を「スカート状」と表現することがあるが、必ずしも全てのスカートがふくらむわけではないので、本論では「パニエ状」と表現する。
- (17) この資料については、10 号堅穴出土として扱われることが多かった（大塚 1968、北構 1974、宇田川 2002 など）。しかし報告書の記載内容を再検討したところ、10 号堅穴に隣接した貝層上からの出土であることが明らかとなった（高橋 2001）。
- (18) ここでいうオホーツク文化の「終末期」の内容は明記されていないが、貼付文期の後半（藤本 e 群）を指すと考えておく。
- (19) 熊木（2018）は、魚骨層Ⅳの堆積期間中に刺突文群と刻文Ⅰ群への交代が生じ、魚骨層Ⅲを刻文ⅠからⅡへと漸移的に推移する過程とみている。間層Ⅲ/Ⅳの堆積時期は、刻文期前半ということになるだろう。
- (20) 偶像から直接過去の風俗（服装や髪形など）を復元する研究は、明治時代の土偶研究で盛んに行われた。現在でも黥面など一部の要素について試みられることがある。
- (21) 大塚論文の中でセイウチ牙と判断した根拠が明示されているのは、上泊遺跡採集の牙製クマ像についてであり、「セイウチの牙に特有の髷がクマの背中全体にみられる」と述べられている。
- (22) 筆者は、アラスカのセント・ローレンス島出土のセイウチ牙製銛頭を観察した経験から、セイウチ牙の象牙質について、透明感のある鉛色～白色で極めて硬質だという印象をもっている。ただし、こうした肉眼観察による印象で原材を同定できるかどうかについては、慎重であるべきだろう。
- (23) 前田・内山（2001）はマッコウクジラの歯の断面図（p.90、第 3 図）と牙製婦人像の素材利用想定図（p.91、第 4 図）を示している。マッコウクジラ下顎歯を利用したとする想定は正しいと考えられるが、図示されているのは先端のエナメル質までセメント質に覆われたマッコウクジラ上顎歯の断面であり、本文の記述と整合していない。

- ②4 骨象牙質 osteodentin はセイウチ牙だけに限られるわけではなく、例えばマッコウクジラの歯の中心部にも形成される。ただし、セイウチ牙ほど特徴的に発達するわけではないらしい。
- ②5 大塚のいう「小形で非常に抽象化の進んだもの」は、モヨロ貝塚出土のポーン状牙製品（図4-9）を念頭に置いていた可能性がある。本論では、この資料を組みこんだ単純的な変遷過程は想定していない。
- ②6 前田は、大塚の分類基準には「頭部の欠損」も含まれていると考えており、本論とはやや異なる解釈である。

図版出典

- 図2-1：坪井 1901、2～4：大塚 1968、5：前田・内山 2001、6a：Salmony 1940、6b：III ep 1966
- 図3-7：右側面は米村・北構 1940、下面は米村 1950、他三面は大塚 1968、8：高橋 2021、9：米村・北構 1940、10：北構 2001、11：東京教育大学文学部 1974
- 図4-1：木村 1984、2・3：大場・大井編 1976、4・5：大場・大井編 1981、6：大場・大井編 1973、7：枝幸町教委 1994、8：網走市教委 2009、9：高橋 2021、10：北構 2003

引用・参考文献

- 網走市教育委員会 2009『史跡最寄貝塚』
- 宇田川洋 1988『アイヌ文化成立史』北海道出版企画センター
- 宇田川洋 2001「動物意匠遺物とアイヌの動物信仰」『東京大学考古学研究室紀要』8:1-42
- 宇田川洋 2002「もう一つの日本列島史」『北の異界—古代オホーツク氷民文化』東京大学コレクション、東京大学総合研究博物館、pp.62-71
- 枝幸町教育委員会 1994『目梨泊遺跡：一般国道238号枝幸町斜内改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 大井晴男 1972「礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について：擦文文化とオホーツク文化の関係について、補

- 論2」『北方文化研究報告』6:1-36
- 大井晴男 1976「第1節 礼文島の遺跡群」『香深井遺跡』上、pp.3-19
- 大井晴男編 1982『シンポジウム オホーツク文化の諸問題』学生社
- 大川 清 1950「北方文化圏出土の婦人像」『古代』2:38-41（1954年に1・2合併号として再刊）
- 大川 清 1998『北海二島：禮文・利尻島の考古資料』、窯業史博物館
- 大隅清治 1997『クジラは昔陸を歩いていた』PHP研究所
- 大塚和義 1968「オホーツク文化の偶像・動物意匠遺物」『物質文化』11:21-32
- 大塚和義・加藤晋平・桜井清彦・山口敏 1975「海獣狩猟民・オホーツク文化の源流」『どるめん』6:47-90
- 大場利夫・大井晴男編 1973『オンコロマナイ貝塚』オホーツク文化の研究1、東京大学出版会
- 大場利夫・大井晴男編 1976『香深井遺跡』上、オホーツク文化の研究2、東京大学出版会
- 大場利夫・大井晴男編 1981『香深井遺跡』下、オホーツク文化の研究3、東京大学出版会
- 菊池俊彦 1978「オホーツク文化の起源と周辺諸文化との関連」『北方文化研究』12:39-74
- 菊池俊彦 2004『環オホーツク海古代文化の研究』北海道大学図書刊行会
- 北構保男 1974「牙製婦人像について」『オンネモト貝塚』、北地文化研究会、pp.169-199
- 北構保男 2001「牙製婦人像の新出資料」『アイヌ民族・オホーツク文化関連研究論文翻訳集』、北地文化研究会、pp.121-123
- 北構保男 2003「オホーツク文化遺跡出土婦人像の追加資料」『アイヌ民族・オホーツク文化関連研究論文翻訳集』、北地文化研究会、pp.110-112
- 北構保男・岩崎卓也 1967「北海道根室市オンネモト遺跡の調査」『考古学ジャーナル』15:14-16
- 木村信六 1984「樺太本斗町南浜通二丁目貝塚調査報告」『千島・樺太の文化誌』北海道出版企画センター（初出：1934）

- 熊木俊朗 2009「オホーツク土器の編年と各遺構の時期について」網走市教委『史跡最寄貝塚』、pp.303-319
- 熊木俊朗 2018『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』、北海道出版企画センター
- 児玉作左衛門・大場利夫 1952「礼文島船泊砂丘遺跡の発掘に就て」『北方文化研究報告』7:167-269
- 駒井和愛 1964「モヨロ貝塚の発掘」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下、pp.7-19
- 駒井和愛・佐藤達夫 1964「オホーツク遺物の特色」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下、pp.78-88
- サルモニー、アルフレッド 2001「石製婦人像に関する研究」『アイヌ民族・オホーツク文化関連研究論文翻訳集』、北地文化研究会、pp.78-91
- 角達之助 2004「オホーツク文化の動物意匠遺物についての一考察」『北方島文化研究』2:49-60
- 高橋 健 2021「モヨロ貝塚出土の牙製婦人像」『東京大学考古学研究室研究紀要』34（印刷中）
- 高島孝宗 2003「オホーツク文化の信仰と儀礼」『続縄文・オホーツク文化』、北海道の古代2、北海道新聞社、pp.162-181
- 高島孝宗 2005「オホーツク文化における威信材の分布について」『海と考古学』、六一書房、pp.23-44
- 東京教育大学文学部 1974『オンネモト遺跡』東京教育大学文学部考古学研究報告4
- 坪井正五郎 1901「北海道利尻貝塚発見の海獣牙製の人形」『東京人類学会雑誌』178:125-128
- 林 俊雄 2005『ユーラシアの石人』雄山閣
- 前田 潮 2002「第3章第1節 牙製婦人像について」『オホーツクの考古学』同成社、pp.97-108
- 前田 潮・内山幸子 2001「礼文島浜中2遺跡出土の牙製婦人像」『考古学雑誌』86(3): 293-305（同論文の内山執筆部分「素材の動物考古学的検討」以外は、前田2002にほぼ再録）
- 松野正彦・佐藤忠雄・兼重達男 1970「礼文島神崎ウエンナイボ遺跡調査概報」『考古学雑誌』56(2):66-82
- 米村喜男衛 1950『モヨロ貝塚資料集』網走郷土博物館
- 米村喜男衛 1969『モヨロ貝塚：古代北方文化の発見』講談社
- 米村喜男衛・北構保男 1940「オホーツク文化圏出土の牙製婦人像」『考古学』11(11):654-660
- 利尻町教育委員会 1978『亦稚貝塚』
- 礼文町教育委員会 1986『重兵衛沢2遺跡』
- 礼文町教育委員会 1992『浜中2遺跡発掘調査報告書』
- 礼文町立神崎小学校 n.d.「神小のあゆみ」
<http://reikyoi.jp/kanshou/index.php/about/>（2021年1月11日閲覧）
- Radloff, W.1892
Atlas der Alterthümer der Mongolei : vol.1, St.Petersburg（国立情報学研究所「デジタル・シルクロード」／東洋文庫 . doi: 10.20676/00000220.）
- Salmony, A. 1940
Notes on a "Kamennaya Baba". *Artibus Asiae*. 13:4-16
- U.S. Fish & Wildlife Service n.d.
Ivory identification guide. https://www.fws.gov/lab/ivory_guide.php（2020年12月31日閲覧）
- Ше р , Я . А . 1966
Каменше Изваяния Семпречья.

Ivory female figurine of the Okhotsk Culture

Ken Takahashi

The ivory female figurine is said to be one of the most representative artifacts of the Okhotsk culture in Hokkaido. There has been little progress, however, in the study of these artifacts in the last twenty years. In this paper, the author examines the research history of these artifacts and points out that the specimen reported by A. Salmony in 1940 cannot be the “original figurine” on the Asian Continent, as it has often been claimed. The author also discusses the transformation process of the ivory figurines and forms a hypothetical chronology of the figurines in three stages, from the early to late Okhotsk culture.

オホーツク文化の銚頭の分類についての覚書

高橋 健*

はじめに

紀元後5～9世紀頃に北海道オホーツク海沿岸を中心に広がったオホーツク文化は、海獣狩猟を積極的に行っていたことで知られる。オホーツク文化の遺跡からは、オットセイやアザラシなどの海獣の骨や、銚頭や釣針などの狩猟漁撈具が大量に出土する。

オホーツク文化の銚頭の分類としては、前田(1974)による分類が用いられることが多い。筆者も、2002年の東京大学総合研究博物館での展示『北の異界:古代オホーツク氷民文化』の図録において、この前田1974年分類を整理した分類図(参考図1)を示し、分類基準について解説したことがある(高橋2002)。その後も、発掘調査報告書の実績記載⁽¹⁾や個別のテーマに関する論考、骨角器についての概説などでオホーツク文化の銚頭を取り上げてきたが、サハリンの資料の分類についての検討(高橋他2005)を行った以外は、銚頭の分類そのものを論じる機会はなかった。これは、少なくとも北海道のオホーツク文化に関する限りは、今日でも前田1974年分類の枠組みに大きな変更の必要性はないと考えているためである。しかし、2002年の解説からすでに20年近くが経過しており、基本的な考え方に変更はないものの、用語等に一部修正を加えた部分

がある。本稿では北海道オホーツク文化の銚頭の分類について、改めて筆者の考えを整理してみたい。また、筆者が銚頭の分類を示すのに多用してきたマス目状の分類図についても検討する。

分類基準

銚とは、水域で狩猟漁撈に使用される刺突具のうち、獲物に刺さった後に先端部が柄から外れ、先端

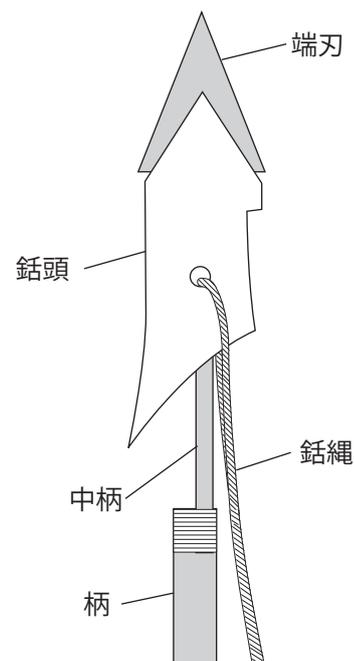


図1 銚を構成する部品

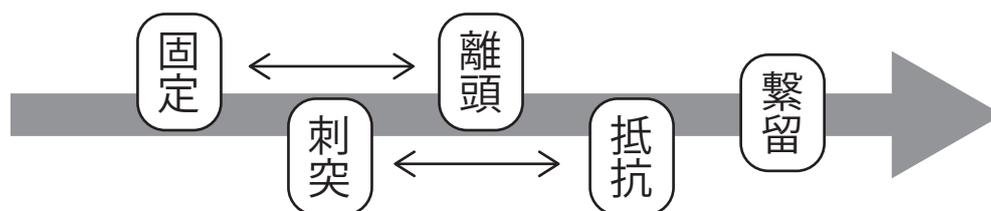


図2 銚頭の機能

*TAKAHASHI Ken 横浜ユーラシア文化館主任学芸員

部に結びつけられた縄によって獲物を確保する仕組みのものを指す。銚は、銚頭（銚先）、中柄、柄、銚縄（繫索）などの部品で構成される（図1）。

銚頭には、固定・刺突・離頭・抵抗・繫留の5つの機能が備わっている（図2、図4d）。すなわち、柄²⁾に固定され（固定）、獲物に突き刺さり（刺突）、先端が柄から外れ（離頭）、獲物の体内に引っかかり（抵抗）、銚縄によって獲物をつなぎとめる（繫留）。銚頭の中心的な機能は、その定義からも明らかなように、離頭機能である。繫留機能も、刺突具の中では銚頭にほぼ特有の機能とみてよい（ただし、柄に固定するための加工と区別が難しい場合がある）。抵抗機能はヤスの一部にも備わっており、固定機能と刺突機能は柄に装着する刺突具全般に共通する。また、これらの機能の中には、固定と離頭、刺突と抵抗のように、相反する性質のものがある。銚頭の形態・構造は、こうした複数の、時に相反する機能を満たすために工夫されている。

銚頭の種類は、いくつかの異なる着眼点によって行われてきた。上にみた諸機能との関係に注目しながら、これらの分類基準を概観してみたい。研究史や過去の用例との比較については、すでに詳しく述べたことがあるため（高橋2001・2008）、本稿では繰り返さない³⁾。銚頭の部分名称については図3に示しておいた。

まず、固定機能と離頭機能については、獲物に刺さるまでは銚頭をしっかりと柄に固定し、刺さった後はすみやかに柄から外れる必要がある。このために、柄への装着方法としては、凸部と凹部を組み合わせる構造が採用されることが多い。銚頭本体に設けた凹部（ソケット）に柄（中柄）先端の凸部を差し込むタイプを雌形と呼び、銚頭基部の凸部を柄先端の凹部に差し込むタイプを雄形と呼ぶ（図4a）。

このうち雌形は、ソケットの形状によって細分されている（図4b）。ソケットの断面形が閉じている（穴になっている）ものを閉窩式、開いているものを開窩式と呼ぶ⁴⁾。開窩式には、ソケットの両側壁が内傾・内湾して断面がフラスコ状になり、縄などで補強することなしに銚頭を保持できる例もあるが、北海道のオホーツク文化では確認できない。北海道オホーツク文化にみられる開窩式⁵⁾は、溝状のソケットの周りに縄を巻き付け、できた隙間に柄（中柄）を差し込む仕組みである（図4b下）。

開窩式銚頭は、固定機能と繫留機能との関係によって、さらに兼用式と分離式に分けることができる⁶⁾（図4c）。銚頭には、溝や孔などの縄を結びつけるための加工（装置）がみられる。銚頭を柄に保持する固定機能と、銚頭をつなぎとめる繫留機能を、一つの装置、すなわち溝で兼ねているのが兼用式である。これに対して分離式は、両者の機能が二つの

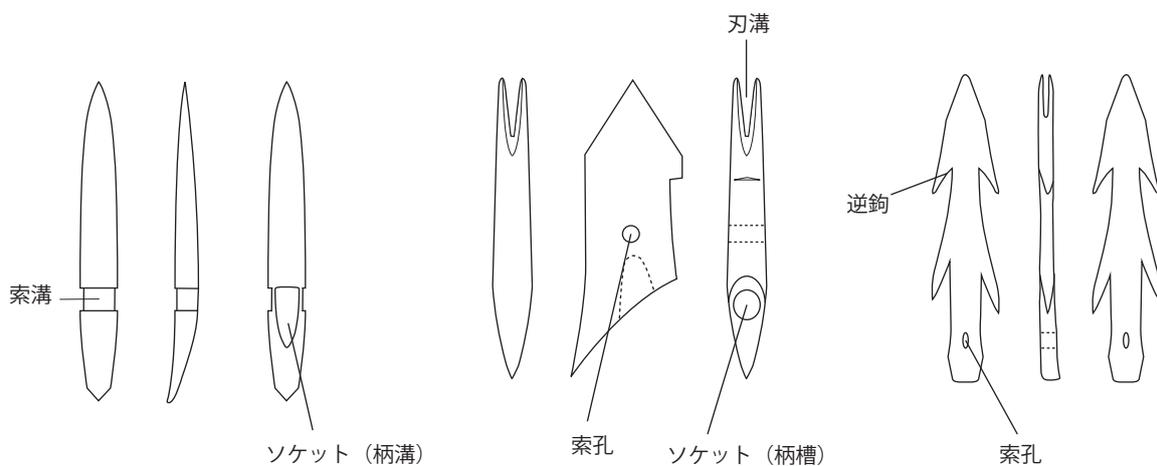
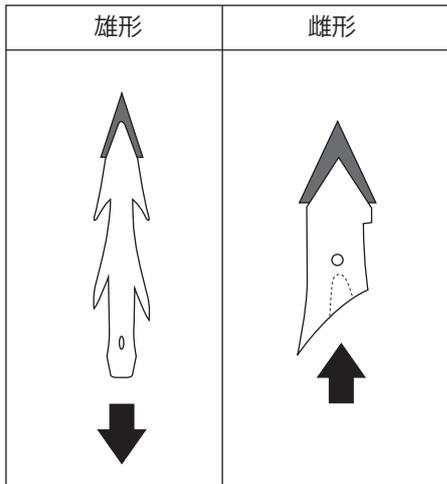
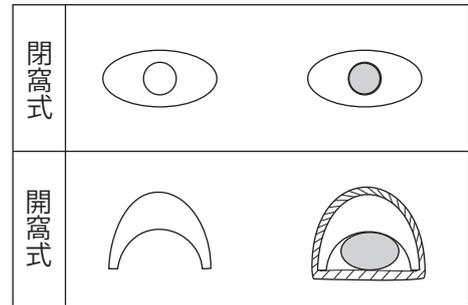


図3 銚頭の部分名称

a. 雄形／雌形

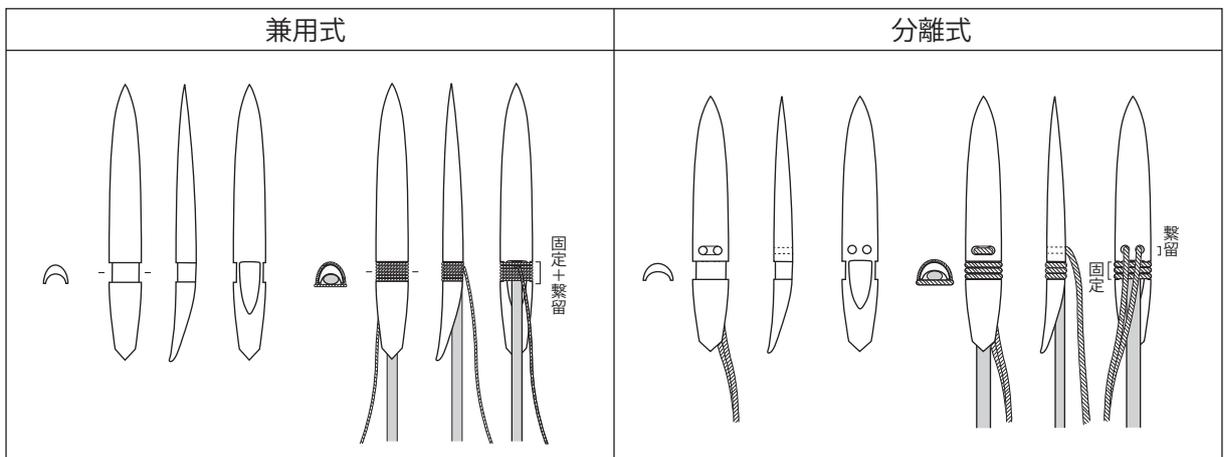


b. 開窩式／閉窩式



(ソケットの断面図)

c. 兼用式／分離式



d. 鉤引式／回転式

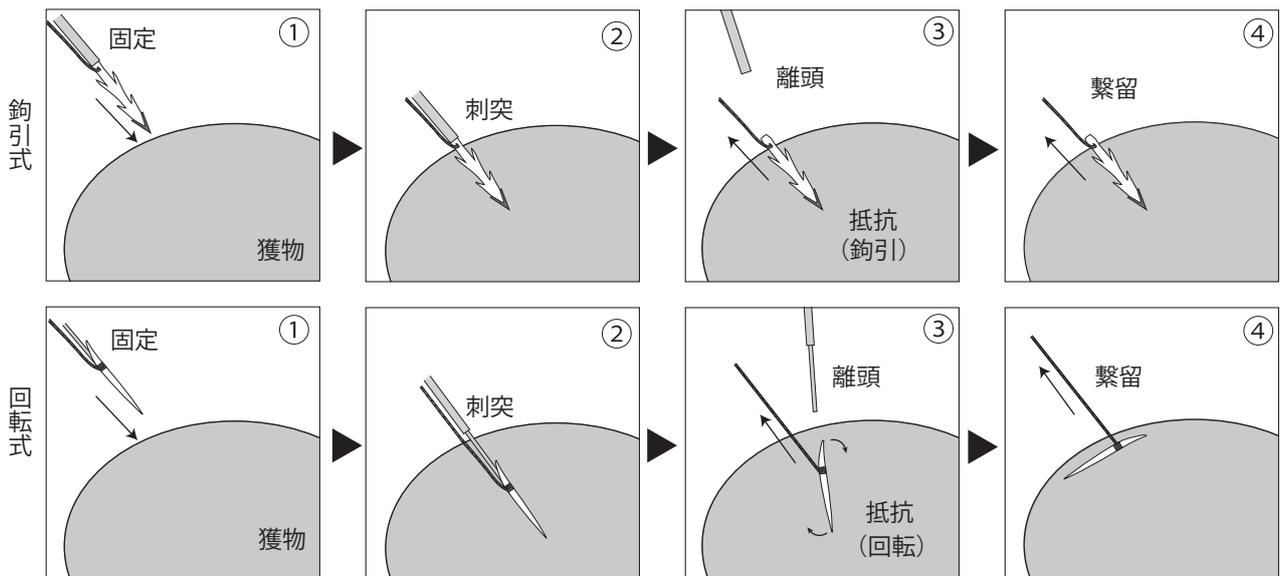


図 4 銚頭の種類基準

装置、すなわち溝と孔に分離している⁽⁷⁾。

以上みた分類基準は、全て柄への装着方法についてであり、固定機能・離頭機能に関わるものであった。このほかに銚頭の分類にあたっては、獲物の体内にどのように引っかかるか、という銚頭の抵抗機能に関わる分類基準がしばしば用いられる(図4d)。ギザギザの逆鉤(かえし、かえり、逆刺)によって引っかけるという方法が、鉤引式である⁽⁸⁾。これに対して、獲物の体内で銚頭が方向を変えて留め金のように引っかかるという方法が、回転式である。この回転式・鉤引式の分類は銚頭研究において多用されてきたもので、当然それだけの有効性があると考えられる。しかし、回転式であるのかどうかの判断が難しい資料が存在し、それをどう扱うかについて、研究者間で意見が分かれてきた。前田(2002)によって新たに提唱された逆鉤の数と索孔の位置による「複合式」も、抵抗機能による分類である。

さらに、回転式を抵抗面(90度回転したと想定した場合に抵抗を受ける面)の幅が広いタイプと狭いタイプに細分することがある。これも抵抗機能に注目した分類である。エスキモーの銚頭で使われるFlat typeとThin typeや、後述するオホーツク文化のC群/D群の分類がこれに相当する。

銚頭をどうやってつなぎとめるかという繫留機能については、銚縄の装着方法によっていくつかの分類が可能である。まず、銚頭に溝(索溝)を設けてそこに結び付ける方法がある。この溝が固定機能を兼ねているものが、前述した兼用式になるわけである。孔(索孔)に縄を通す方法は、孔の数と方向で細分可能である。抵抗面に対して平行な方向(横方向)に一つの孔をもつ場合と、抵抗面と直交する方向(縦方向)に二つの孔をもつ場合である⁽⁹⁾。

オホーツク文化の銚頭の分類

オホーツク文化の銚頭に対する前田1974年分類の内容を、前項で示した基準にしたがって整理してみたい(図5)。論文のタイトルに「回転式銚頭」

があることから明らかなように、まず抵抗機能による回転式/カエリ式(本稿の鉤引式)の分類が先行して行われている。また、対象となっている資料は、柄への装着方法では全て雌形銚頭である。ソケットの断面形でみると、A群・B群が開窩式、C群~E群が閉窩式である。

開窩式については、固定機能と繫留機能との関係によって、兼用式がA群、分離式がB群に細分される。閉窩式については、抵抗面の幅と索孔の方向・数の二つの方法で細分されている。抵抗面の幅に注目した場合、抵抗面の幅が狭いのがC群であり、広いのがD群・E群である。一方、索孔の方向・数に注目した場合、抵抗面に平行な方向に一つの孔をもつのがC群・D群、抵抗面と直交する方向に二つの孔をもつのがE群である。

さらに前田分類においては、頭部形態による細分が行われている。単純に尖るものを1類、石鏃や鉄鏃を装着するための溝を設けるものを2類、両側にカエシを設けるものを3類としている。この分類基準は、A群~E群とは独立した基準として設けられている。前述した銚頭の機能との関連でいえば刺突機能、一部は抵抗機能に関係する分類基準である。

前田は、2002年にオホーツク文化の銚頭の分類を改訂している(前田2002)。1974年の分類が回転式銚頭を対象を絞っていたのに対して、Iカエリ式、II回転式、III複合式の三群を「最も基本的な機能分類」として導入している。そして、従来の「E群と構造的にほとんど一致しながら、ソケットが閉窩式をとる」グループを新F群として分離した。さらに「上記の開窩式(新F群:引用者註)と同一構造・特徴を具えながら、2対以上のカエリを左右の体側に具え、しかも銚縄を結縛する索孔が体中央部よりに設けられ、回転機能を具えていることを示す一群」を、III群(複合式)だとしている。つまり構造的にほとんど同じ銚頭を、E群、新F群、III群として分離したことになる。この前田による新分類案は、いくつかの重要な指摘を含んではいる

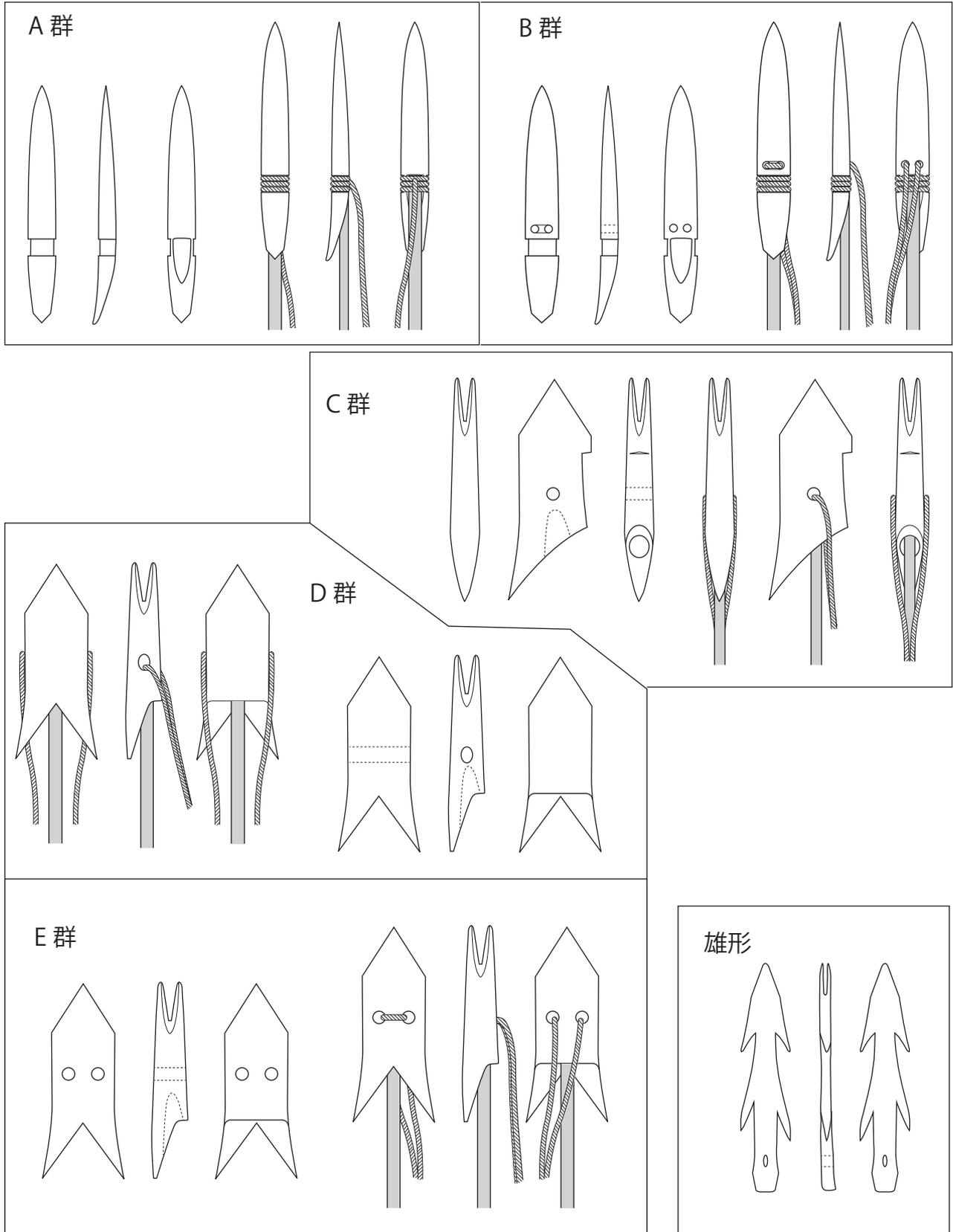


図5 オホーツク文化の銚頭の分類

ものの、全体としては山浦が批判するように「以前の論考よりも問題を複雑化させただけのものとなってしまっている」（山浦2008: p.15）と言わざるを得ない。サハリン出土の資料の中に従来のA群～E群の範囲に収まらないタイプの銚頭が存在することは事実だが、その認定基準には検討の余地があるといえよう。特に「複合式」の設定については、必ずしも研究上有効とは考えられないと筆者も指摘したことがある（高橋他2005）。

銚頭の分類図

オホーツク文化の銚頭の分類について、筆者は縦軸横軸に異なる分類基準を組み合わせて銚頭を配置したマス目状の分類図を用いて説明したことがある（高橋2002、参考図1）。こうした分類図による説明は、その前年に発表した続縄文時代の銚頭に対する研究において使用したものが原型となっている（高橋2001、参考図2）。この続縄文の分類図は、それまでしばしば混乱がみられた雄形／雌形と鉤引式／回転式の分類基準を明確に区別し、さらに両者を組み合わせることによって、当時議論されていた「恵山型」ないし「茎孔式双尾」（筆者の分類では第2種）銚頭の特徴を説明しようとしたものである。しかしながら、オホーツク文化の場合は、続縄文と同じ基準を適用しただけでは、開窩式・回転式（A・B群）と閉窩式・回転式（C～E群）、雄形・鉤引式の3つに大別されるだけで、それ以上の細別ができない。このため参考図1では、3つ目の軸（図では左側）として「繩の機能／方向」を追加して兼用式／分離式（当時は索紐兼用式と索独立式と呼称）と索孔の方向による分類基準を加え、さらに右側の軸に移した抵抗機能による分類には抵抗面の幅の広狭という回転式の細分基準を加えていた。

参考図1左下に示した資料は、サハリン・プロムイソロボエII遺跡出土資料であるが、本文ではこの資料に言及していなかった。したがってこの資料を配置した意図は厳密には不明であるが、当時の続

縄文期銚頭研究を背景に、雌形かつ鉤引式の例として図示したものである。この資料は、同年に前田による新分類で「III 複合式」の例として提示されることになる。

参考図3は、2009年にモヨロ貝塚の発掘調査報告書において示した分類図である（高橋2009）。出土資料の報告であるため、アイヌ文化の資料も含めてI類～IV類という分類を採用しているが、その結果は基本的には前田分類と一致している⁴⁰⁾。この分類図を2002年のもの（参考図1）と比較すると、まず対象を雌形・回転式の銚頭に限定しており、雄形の列と鉤引式の行に相当する部分がなくなっている。これはオホーツク文化では雌形・回転式と比較して雄形・鉤引式の分類は分かりやすいと考えて省略したものである。しかし、雄形・鉤引式は道東部オホーツク文化の銚頭を特徴づけるタイプであり、省略したのは適切ではなかったかもしれない。分類基準の縦横を入れ替えているが、これはレイアウトの都合であり深い意味はない。右辺に「全体の形状」を加えたのは、アイヌ文化期のIV類をII類と区別するためであった。結果として、この図では四辺に分類基準が配置されている。

参考図4は、オホーツク文化の銚頭についての一般向けの概説の中で使用した分類図である（高橋2013）。基本的な配置は参考図3と変わらないが、対象をオホーツク文化に限定し、縦横の軸からは独立した形で「雄形・鉤引式」の資料を付け加えている。また、分類名称は、前田1974年分類に従っている。また、参考図1・3では、閉窩式も分離式に含まれていたが、参考図4では閉窩式のC群やD群が分離式に含まれないような配置になっている。これは兼用式／分離式の区別を開窩式の下位分類として位置付けるような、見解の変更があったことを示している。ただし、やはり閉窩式のE群が分離式として配置されているため、この分類図における変更は不徹底であった。

参考図5は、2018年に、北海道における銚頭の変

遷を通時的に説明する中で使用した分類図である(高橋2018)。雄形・鉤引式の分類基準を復活させ、兼用式／分離式の区分は引き続き開窩式の下位分類としている、さらに、幅の広狭・索孔の方向については、「回転式・閉窩式」の銚頭だけに適用する下位分類としている。これらの結果として、2軸の中に2軸が入った入れ子状の分類図になっている。E群の位置づけは閉窩式の下位に変更され、兼用式／分離式の分類とは無関係である。また、地域差や時期差についてのコメントを書き加えている。

続縄文の銚頭を対象とした参考図2が2軸によるある意味で単純明快な分類図であったのに対して、オホーツク文化の銚頭の分類図は、3軸や入れ子状になっており、より複雑な形態である。これはオホーツク文化の銚頭が、複数の着眼点による、かつ複数の階層にわたる分類基準を組み合わせて分類されていることを反映している。

おわりに

本稿では、筆者がこれまでにオホーツク文化の銚頭に対して行ってきた分類について、その基準を整理した。また、筆者がこれまで示してきた分類図を概観し、その修正点の背景にある考え方の変化と問題点を指摘した。オホーツク文化の銚頭の分類を示すのに、筆者がこれまで多用してきたマス目状の分類図が有効なのか、あるいはこれに代わるより分かりやすい提示方法があるのかについては、今後の検討課題としたい。

〔註〕

- (1) トコロチャシ跡遺跡やモヨロ貝塚の発掘調査報告書の事実記載では、それぞれの遺跡での出土資料に応じた分類を採用していたが、その際の分類基準および分類結果は、基本的に前田1974年分類によるものと一致している。
- (2) 以下の本文中で、銚頭の装着方法について述べる場合の「柄」には中柄も含んでいる。日本列島の先史時代にも中柄は用いられたと考えられるが、考古資料でははっきり

しないことが多い。

- (3) 銚頭の用語や分類については、旧稿の刊行後にも小杉(2016)や福井(2017)による論考が発表されており、そこには筆者の見解に対する批判も含まれている。銚頭の分類について述べるにあたっては当然これらの見解にも触れるべきだが、いずれも続縄文文化の銚頭を扱った論考のため、本稿の扱う範囲から大きく逸脱することになる。このため、続縄文文化の銚頭についての別稿を用意することにして、本稿では基本的に従来の筆者の立場に従っておきたい。
- (4) 開窩式の定義は、研究者間で一致をみていない(高橋2008)。本稿の説明は、あくまで筆者の立場によるものである。
- (5) 前田の用語では「茎溝式」であり、アラスカ考古学における grooved harpoon に相当する。前田は、オホーツク文化期より新しい時期の銚頭である(旧)F群を「開窩式」として区別している。その分類基準は1974年論文中では明示されていないが、前田(1967)では、「開窩式と有溝型(茎溝式)とは類似した外形を示すが製作過程はこのように異なる」と述べており、製作過程の違い(開窩式はまず孔を穿ってから切り開く)を基準としている。
- (6) 兼用式の構造をもつ銚頭は、北海道で縄文時代から擦文時代まで、長く使われる。
- (7) 溝と孔ではなく、固定用と繫留用の溝を1本ずつ、計2本もつような場合もあるが、オホーツク文化にはそのような例はみられない。
- (8) 鉤引式のほかに有鉤式やカエリ式などの用語も用いられることがあるが、「回転式」が広く使われているのとは対照的に、いずれもあまり普及していない。
- (9) 縄文時代の「燕形銚頭」は、回転面と平行な方向に一つの索孔をもつ。こうしたタイプが主流を占めることは、北太平洋沿岸の銚頭を広く見渡しても例外的である。
- (10) 厳密に言えば、各分類群を並列で並べている前田分類に比べて、モヨロ貝塚で筆者が提示した分類案は、閉窩式であるC群～E群を下位の基準で細分した階層的な構成になっている。

引用・参考文献

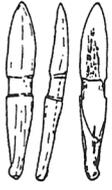
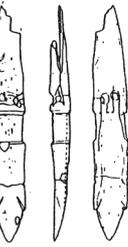
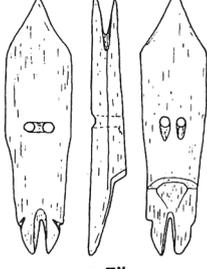
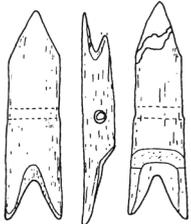
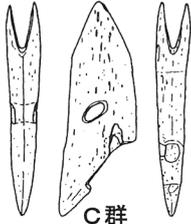
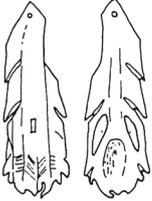
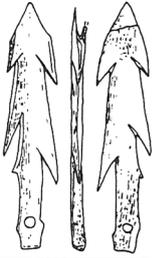
- 小杉 康 2016 「続縄文前半期における礼文華遺跡の銚頭」『北海道考古学』52:1-18
- 高橋 健 2001 「続縄文時代前半期の銚頭の研究」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』16:82-137（高橋 2008 に再録）
- 高橋 健 2002 「海に生きたオホーツク人」『北の異界—古代オホーツクと氷民文化』東京大学総合研究博物館特別展示東京大学コレクション XIII、pp.80-93
- 高橋 健 2008 『日本列島における銚頭の考古学的研究』北海道出版企画センター
- 高橋 健 2009 「骨角器」『史跡最寄貝塚』網走市教育委員会、pp. 320-336
- 高橋 健 2013 「オホーツク文化の骨角器」『Arctic Circle』89:4-8

- 高橋 健 2018 「海獣狩猟の変遷」『Biostory』30:23-27
- 高橋 健・V. デリューギン・IYa. シェフコムード・S.F. コシツェナ 2005 「ハバロフスク州郷土誌博物館所蔵の銚頭関連資料について」
- 福井淳一 2017 「続縄文文化における骨角器の動態」『北海道考古学』53:71-90
- 前田 潮 1967 「『有溝型銚頭』についての二、三の問題」『大塚考古』8:11-18
- 前田 潮 1974 「オホーツク文化とそれ以降の回転式銚頭の型式とその変遷」『史学研究』96（再録：前田潮 1987 『北方狩猟民の考古学』、pp.65-114）
- 前田 潮 2002 『オホーツクの考古学』同成社
- 山浦 清 2008 「プロト=アイヌ期以降における銚頭の変遷とその背景」『北海道考古学』44:1-20

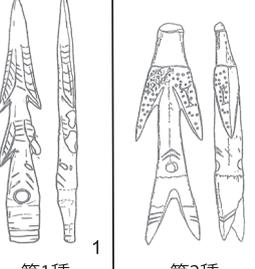
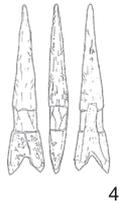
A note on the classification of harpoon heads of the Okhotsk culture.

Ken Takahashi

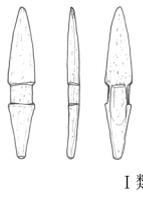
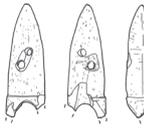
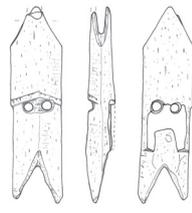
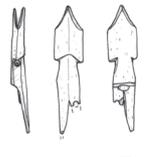
The Okhotsk culture is known as a sea-mammal hunting culture, having a variety of harpoon heads. In 1974, U. Maeda classified the toggle harpoon heads of the Okhotsk culture into five types, from Type A to Type E. In this note, the author illustrates these types from the perspective of the function of the harpoon heads: hafting, thrusting, detaching, hooking and holding.

		柄への装着方法					
		雌形		雄形			
		開窩式	閉窩式				
縄の機能／方向	索紐兼用式	 A群				抵抗面の幅広い 回転式 抵抗機能	
	抵抗面に直角	 B群	 E群				
	索独立式		 D群				
	抵抗面に平行		 C群				抵抗面の幅狭い
							鉤引式

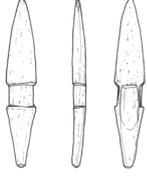
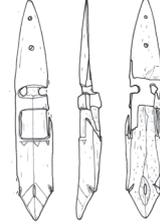
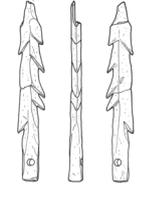
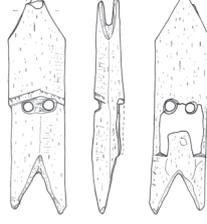
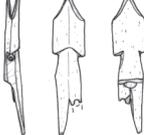
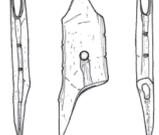
参考図 1 オホーツク文化の銚頭の分類図 (高橋 2002)

		柄への装着方法			
		雄形	雌形		
			閉窩式	開窩式	
		兼用式		分離式	
抵抗機能	鉤引式	 <p>第1種 第2種</p>		<p>1~3 有珠モシリ 4 茶津2号洞穴 5 祝津貝塚</p> <p>0 5cm</p> 	
	回転式	 <p>第3種 第4種</p>	 <p>第4種 第5種</p>		

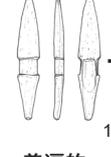
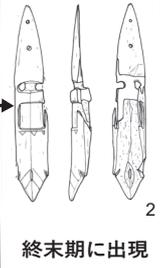
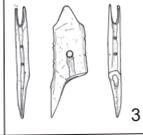
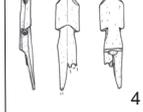
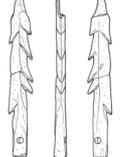
参考図2 続縄文時代の銚頭の分類 (高橋 2008: 初出 2001)

		繫留機能と固定機能				全体の形状
		兼用式	分離式			
			索孔が抵抗面に直角	索孔が抵抗面に平行		
ソケットの形状	開窩式	 <p>I類</p>	 <p>IV類</p>	<p>(縮尺不同) II類: 高橋 2003 より転載</p>		円錐形
	閉窩式		 <p>IIIc類 IIIb類</p>	 <p>IIIa類</p>		柳葉形
		広い		狭い		
		抵抗面の幅				

参考図3 モヨロ貝塚出土の銚頭の分類 (高橋 2009)

		繋留機能と固定機能			
		兼用式	分離式		
ソケットの形状	開窩式	 <p>A 群</p>	 <p>B 群</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 雄形・鉤引式  </div> <p>他は全て雌形・回転式</p>	
	閉窩式	<p>A～E 群の分類は、前田潮 1974 による（縮尺不同）</p>	 <p>E 群</p>	 <p>D 群</p>	 <p>C 群</p>
				抵抗面の幅広い	狭い
		索孔が抵抗面に直角		平行	
		索孔と抵抗面			

参考図 4 モヨロ貝塚出土の銚頭の分類（高橋 2013）

		柄への装着方法				雄形
		開窩式		閉窩式		
		兼用式	分離式	前半期に多い		
抵抗機能	回転式	<p>在地の伝統</p>  <p>普遍的</p>	 <p>終末期に出現</p>	<p>索孔横 1</p>  <p>幅狭い</p>	<p>索孔縦 2</p>  <p>幅広い</p>	<p>1-6 モヨロ貝塚</p> 
	鉤引式	道東に多い				 <p>6</p>

参考図 5 オホーツク文化の銚頭の分類（高橋 2018）

洋画家小間嘉幸と そのシルクロード作品について

竹田多麻子*

はじめに

小間嘉幸氏（1929～2012）は1970年代から約30年にわたりシルクロードを旅して、その土地の風景や人々の姿を描いてきた洋画家である。横浜ユーラシア文化館では2019年から2020年にかけて小間氏の油絵作品とスケッチブックをご遺族から寄贈頂いた。これを受けて、当館では2020年10月3日～12月27日に企画展「杏咲く頃—絵筆と歩いたシルクロード 小間嘉幸絵画展」を開催し、主な油絵作品23点とスケッチに収録されている水彩作品などを展示したほか、絵のモチーフに関わる考古、美術、民族資料なども併せて紹介した。展示のアンケート結果では、「作品に感動した」「画家自身に興味を持った」などの感想が寄せられたため、本稿では、展示や図録で十分に紹介できなかった小間氏の経歴⁽¹⁾、シルクロードへの取材旅行、画風の特徴、資料的な価値を取り上げ、紹介する。

なお、本文中では人名の敬称を省略させて頂いた。

1 小間嘉幸について

小間嘉幸は、1929年群馬県富岡市大島にて父小間吉也と母ひでの三男として生まれた。小間家は先祖代々からの大地主で、吉也は婿養子として稼業を継いだ。戦後の農地改革により田畑を失い、残った山林を管理し、林業や養蚕業等に従事していたという。イギリスから自転車や洋犬を輸入するぐらいハイカラな人物であったようだ。それだけ経済的に余裕があったのだろう。

中学校時代から美術部に属していた小間には、高校卒業後は美大に進学し絵の道を極めたいという夢

があったが父の反対にあい、群馬県立富岡高等学校を卒業後いったん税務署に就職。それでもなお画家になる夢を捨てられず、翌年単身上京し、多摩美術大学を受験する。合格し、油絵学科に入学、1952年に卒業する。卒業後は美術の教員となり、府中市と国立市等の中学校に勤めながら、絵画の制作活動を継続した。大学卒業後は、一年目に光風会で初入選し、その後、日展や白日展でも多数の入選を果たす。1975年には白日展文部大臣賞を受賞し、国内の画壇で活躍した。国内だけでなく海外の題材を扱うようになったのは、小間が43歳（1972年）の時になる。シルクロード旅行での取材を重ねて、作品制作を行っていった。50歳を期に、画業に専念するため教師の職を辞し、それ以降、個展やグループ展を精力的に行った。2012年に東京にて逝去。

小間の絵に対する関心は、絵をたしなむ祖父嘉平の影響があったようだ。また、子供時代に家の襖全てを取り替えることになり、一人の画家を自宅に住まわせて襖絵を描かせたことがあったそうだ。後年、小間はそれを眺めていた自身を含む兄妹たち皆がその絵が仕上がっていく様子に感動した、と語っている。このような日常的に絵画に触れる環境にいたことが、小間を絵の道に進ませたのだろう。この環境は、他の兄妹にも影響を与えた。2歳年下の弟である小間政男（1931～2017）は、彼も兄と同じ大学で油絵を学び、東京の中学校の教員をしながら制作活動を行った洋画家である。また、四女の栄子も油絵を描き、小間、政男、栄子の3人が共に日展に所属していたという。

(1) 小間の画歴や受賞歴などについては、図録『杏咲く頃—絵筆と歩いたシルクロード 小間嘉幸絵画展』（横浜ユーラシア文化館、2020年）を参照されたい。

*TAKEDA Tamako 横浜ユーラシア文化館主任学芸員

2 寄贈作品

当館に寄贈された作品はシルクロードに関わる油絵が73点、スケッチブック29点である。小間の寄贈への意志は、シルクロード関係の作品は美術鑑賞はもちろんの事、博物館でシルクロードの歴史や文化を紹介する時などに活用してほしいというものであった。実際に、今回の展示では、作品のモチーフに関わる考古・美術・民族資料を合わせて展示したが、大変好評であった。

縁あって寄贈のお話を頂き、2012年から受入調査を始めた頃に小間が逝去、その後ご遺族との調整や手続きを経て、2019年に油絵作品、2020年にスケッチブックが収蔵された。

日本を題材にしたものも含め、小間の作品は、当館以外に、彼の故郷である富岡市立美術博物館、日本外務省、日本赤十字社（日赤美術コレクション）、駐日アルメニア共和国大使館、駐日パキスタン大使館、群馬県立富岡高等学校、寸又峡温泉翠紅苑などに収蔵されている。大使館に寄贈したのは、描いた風景をその国の大使館へ贈りたいという強い思いがあったからである。当館としては、現在、情勢の安定していない国々の作品を主に受け入れることになった。

油絵作品は、シルクロードの壮大な自然、遺跡や建造物、遊牧民などの現地で暮らす人々の姿が描かれている。描かれた場所は、作品タイトル、風景・建物・民族衣装、スケッチブックのデッサン、文献⁽²⁾などを参照して同定した。その結果、アフガニスタン34点、ウズベキスタン11点、中国6点、シリアとイランが各4点、トルコ3点、ロシア2点、レバノン、パキスタン、ヨルダンが各1点、不明が6点である（56-57頁の油絵作品リスト）。その中でも遊牧民の姿をモチーフにしたものは12点になる。アフガニスタン遊牧民の季節の移動やラクダに乗って進む男性が繰り返し描かれている。アフガニスタンの作品が多いのは、小間のアフガニスタンへの思いがそれだけ強かったのである。晩年、何度も語っ

ていたのが、訪れた国の中でアフガニスタンを一番気に入っていること、特に遊牧民の姿に魅かれ、死ぬ前に再訪したいという願いの言葉であった。府中市に眠る墓の墓石には、ラクダに乗ったアフガニスタンの遊牧民男性のモチーフ（No.2）が刻まれている。

スケッチブックは29点で、取材旅行に小間が携えていたものである。1993、98年時のものは含まれていない。スケッチブックに描かれているのは、遺跡や自然の風景はもとより人々の何気ない動作、動物の様子などで、一瞬にとらえて形にしている。特に、1998年のシリア旅行では、小間の長女で、日本画家の小間典子がアレポ博物館で遺物模写の絵師として働いていた関係で現地での長期滞在が可能となり、スケッチには遺跡や遺物、農作業の様子や現地の伝統的な家屋など実生活の様子が取められている。

人物のデッサンには、モデルの名前が英語やアラビア語でつけられていたり、風景のデッサンには細かく色の指定が描き込まれたりしている。スケッチブックの枚数が少なくなっているものがあるが、恐らく、描いた絵をだれかにあげたか、何かしら必要に迫られてページを破ったのだろう。また、鉛筆デッサンのほかにサインペンを使って一筆書きで描いたり、墨で輪郭をとり、その中を水彩絵具や色鉛筆で塗ったりしている。1回の旅行でスケッチブックは最低3冊用意し、そのほかに、絵画用道具は小さめのキャンバス、スケッチブック、イーゼル、油絵具、水彩絵具、水彩色鉛筆、墨、サインペンなどを持参していた。

3 シルクロード旅行

小間は1972年から1998年までシルクロードの各地を巡っている（表1）。シルクロードに興味をもつきっかけが何であったのかは不明であるが、初めての取材旅行は1972年である。この時の旅行は、昭和を代表する俳人加藤楸邨とその門弟たちが旧ソ

(2) 参考文献については図録『杏咲く頃』を参照されたい。

表1 取材旅行先

年	年齢	訪問国
1972(昭和47)年 夏	43歳	ソ連邦(シベリア、ウズベキスタン)
1973(昭和48)年 春	44歳	アフガニスタン、ソ連邦(ウズベキスタン)
1975(昭和50)年	46歳	レバノン、ギリシャ、イラク、トルコ
1976(昭和51)年 秋	47歳	アフガニスタン、イラン
1979(昭和54)年 秋	50歳	中国・新疆ウイグル自治区
1984(昭和59)年 夏	55歳	中国・新疆ウイグル自治区
1989(平成元年)	60歳	シリア、ヨルダン
1991(平成3)年 春	62歳	中国、パキスタン(中パ公路)
1992(平成4)年 春	63歳	シリア
1993(平成5)年	64歳	イタリア
1995(平成7)年	66歳	トルコ東部
1996(平成8)年	67歳	中国、パキスタン、レバノン
1998(平成10)年	69歳	イラン、トルクメニスタン、ウズベキスタン

連邦を巡り、日本の俳句の可能性を海外で見出すというものであった。小間はその旅行に同行したのである。小間と加藤楸邨の関係は、小間の妻 さち子が女学校時代から加藤の門弟であったことから知り合った縁である。旅行の翌年、加藤は旅行時に詠んだ俳句と記録を『死の塔』⁽³⁾と題して出版するが、その挿絵に、訪問地で目にした建物、遺跡、人々を薄墨を使い軽いタッチで描いた小間のイラストが使われている。また、加藤が創刊した『寒雷』の表紙絵とカット絵を1973年から1993年まで担当した⁽⁴⁾。日本の風景や静物画の表紙絵が多い中、シルクロード作品が表紙となったのは6点で、そのうちの2点は当館で収蔵している(No.51、66)。

取材先を見ると、旧ソ連時代のウズベキスタン、1972年の日中国交正常化によって日本人の個人旅行が可能となった中国、1979年のソ連による侵攻以前のアフガニスタンを訪ねている。また、1979年以降、アフガニスタンへの入国が難しくなると、取材先をアフガンより先のシリア、レバノンなど西アジアへ変更している。小間の取材先がその時代の世界情勢に影響されていることがわかる。

今回、ご遺族から旅程を記録した資料の画像を提供頂いた。資料は、大学ノートに「シルクロードの旅 記録」というタイトルをつけた旅の記録で、1972年から1979年までの5回分の旅程が収められていた。旅行ごとに日時、都市、交通機関、現地時刻、摘要という項目で記録をし、摘要にはその時の行動だけでなく、感想や印象も加えている。また、旅行のパンフレットや地図なども貼り付けられ、地図には、その地点の通過時間や「羊」「雨で山見えず」という状況のメモも記されている。

参考として、取材旅行の5回分の旅程(主な都市)をここに紹介したい。

第1次 1972年7月28日～8月11日 *俳人加藤楸邨による俳句旅行に同行。

東京→ハバロフスク→イルクーツク→アルマータ→タシケント→サマルカンド→ブハラ→タシケント→ハバロフスク→ナトホカ→横浜

第2次 1973年3月28日～4月21日

東京→ハバロフスク→イルクーツク→タシケント

(3) 加藤楸邨『死の塔 西域俳句紀行』毎日新聞社、1973年。
 (4) 1994年以降、表紙絵等は小間典子が担当。『寒雷』は2018年に廃刊となったが、後継誌として『暖響』が刊行され、引き続き表紙絵を担当している。

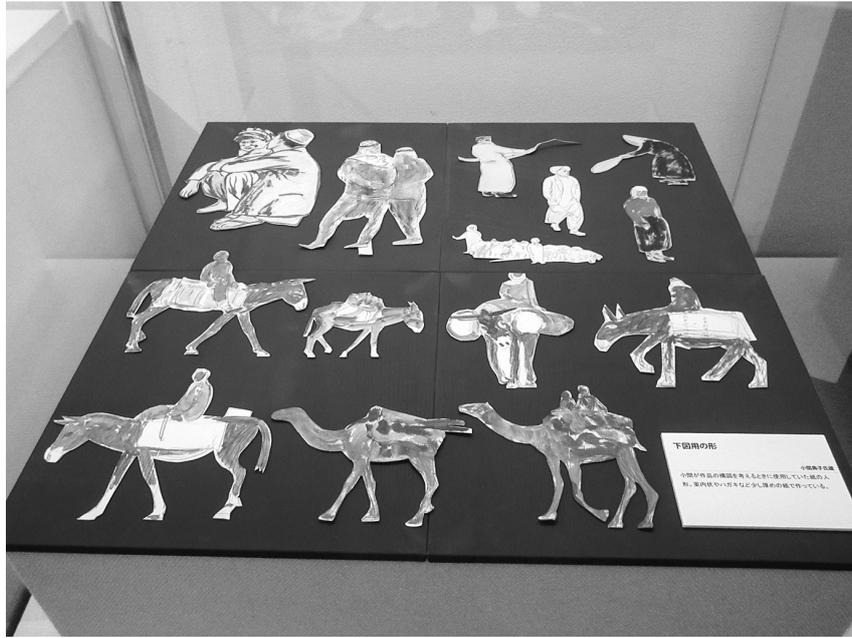


写真1 紙製の人形

→サマルカンド→ブハラ→タシケント→カーブル
→バーミヤン→プリクムリ→マザリシャリフ→ヘ
ラート→ブスト→カンダハール→ガズニ→ペシャ
ワール→ラワルビンディ→タキシラ→カラチ→モ
ヘンジョダロ→カラチ→東京

第3次 1975年3月18日～4月4日

東京→バンコク→デリー→ベイルート→パール
ベック→バグダッド→アテネ→イスタンブール→
イズミール→エフェソス→イスタンブール→カイ
セリ→テヘラン→イスファハーン→ベルセポリス
→シラーズ→テヘラン→ベイルート→デリー→バ
ンコク→マニラ→東京

第4次 1976年9月27日～10月13日

東京→香港→バンコク→デリー→カーブル→バー
ミヤン→プリクムリ→マザリシャリフ→ヘラート
→メシェド→ニシャープール→ゴルガーン→テヘ
ラン→ボンベイ→バンコク→香港→東京

第5次 1979年11月15日～11月30日

東京→上海→蘭州→烏魯木齊→トルファン→烏魯
木齊→石河子→烏魯木齊→蘭州→北京→成田

今後、第6次以降の旅行についても記録が見つか
れば、場所の同定や作品の理解につながるであろう。

3 画風の特徴

画風は、自身が出会った風景などを写生的な表現
を使いつつ力強いタッチと鮮やかな色で描き出して
いるが、見る者に印象を与えるような工夫が随所に
施されている。

それは、特にアフガニスタンの作品で「動」を意
識していることである。作品 No.1 (口絵2)、2、4、
5、13、32などは、人や動物が正面から描かれて
いるので、まるで見ている自分のほうに迫ってくる
かのような動きを感じさせる。また、よく見られる
のが、キャンバス内にモチーフを収めるのではなく、
途中で切ってしまう手法である (No.1、2、4、
5、9、11、17、32)。例えば、No.24 (口絵2) の
作品は、連なって歩く最後の人物が途中で欠けてい
る。この構図が、あたかもアニメか動画の一瞬の映



写真2 アフガニスタンの遊牧民
1970年代 田島勝義撮影



写真3 ラクダの装飾品 (拡大)
1970年代 田島勝義撮影

像を見ている気分にさせるのである。小間は構図にはこだわりをもって、人物をどこに配置するかは手製の紙人形を使って検討していたという。展示では、実際に小間が使用していた人形を展示した(写真1)。人形は、使用済みのハガキや案内状の裏に絵のモチーフを描き、それを切り抜いたものである。使いこんだ跡が残り、人形からは小間が何度も構図を練り直していた様うかがえる。

No.2の右側の男性とNo.13の男性はほぼ同じ姿であるが、気に入ったモチーフは繰り返し使うことが多い。また、隅のほうに人間、動物を小さく描くことで、自然や建造物の壮大さを表現している(No.66、68)。

4 作品の資料的価値

小間の作品の資料的な価値とはどのようなものだろうか。筆者は二つあると考えている。一つは、作品がその国の当時の様子を知るための資料となることである。作品No.1、2、13のアフガニスタン遊牧民のラクダの装飾品に注目すると、房のついた赤い太い紐がラクダの顔に飾りとして巻きつけられ、轡となっている。ちょうど1970年代に撮影された遊牧民の移動の写真からほぼ同じ装飾をしたラクダを見ることができる(写真2、3)。また、No.2のロバの背を覆っているものは、地域は異なるが、このような鞍袋(写真4)である。



写真4 鞍袋 イラン
20世紀 当館蔵

人が身に着けている衣装も、西洋化の服装が主流となっている現代ではどんどんと失われているため、当時の服装を知る手がかりになる。このような作品の中から民族的、文化的情報が得られることは、特にアフガニスタンのような情報が少ない地域については大変意義深いことと考える。ただし、作品内容とタイトルとなっている場所が一致しているかどうかは、十分な検証をすることが必要である。

もう一つは、作品が過去を知る記録となっていることである。バーミヤン大仏やパルミラ遺跡のような現在失われてしまった遺跡(No.14、68)や、ダム建設によって沈められたシリアのテル・アバル遺跡の風景、遊牧民の日常生活といったシリア一連の

様子、レバノンの爆破前の市街地の様子などが描かれたスケッチブックがある。当時の小間は自分の関心の赴くままに描いていたであろうが、その姿が見られない今となっては作品が貴重な資料となっている。

おわりに

シルクロードを描いた画家は、平山郁夫をはじめ洋画家及び日本画家問わずあまた存在する。2005年6月号の『月刊美術』では「遙かなるシルクロード」という特集で、代表的な日本の画家たちが「シルクロード」という道なりに何を感じ、それをどのように描いたのかが紹介されている⁽⁵⁾。シルクロードを仏教の道へのあこがれや「平和の道」としてとらえる者、人々の表情の美しさに魅かれる者がいれば、シルクロードの幻想的な風景や悠久の歴史を表現したいという者もあり、その感じ方や描く動機は画家それぞれであった。小間の作品からは画家のシルクロードへの情熱とそこに暮らす人々への温かいまなざしが感じられるが、そのモチーフは、美しい自然や有名な遺跡だけでなくおしゃべりをしている女性の姿 (No.48)、街角 (No.15)、町の裏通り (No.43) など、なぜここを描いたのかと思う作品もある。そこに小間のシルクロードに対する思いがあるようだ。「クセルクセスの門」(No.51) が表紙となった俳誌『寒雷』400号の「表紙のことば」⁽⁶⁾として小間はこのような記している。「私は旅をするといつも昔を思う。現在は石油王国のイランであるが、古い歴史をもつ遺跡はもとより道々のオアシスの人々や土屋を見ても、古い時代の人々の心に触れたような感慨をおぼえるのであった。」今、目にするものから昔のシルクロードの面影を感じ取っていた。この感覚が、作品制作の源流となっていたのだと思われる。

本稿では、作品を寄贈頂いてから現在までに調査できた範囲の事柄を報告した。小間は取材旅行中に描くだけでなく、作品の基となる写真を多く撮影

しているという。今後、それらの写真資料も使いながら調査を進め、作品の描かれた場所や民族的、文化的な情報をさらに明らかにしていきたい。

謝辞

本稿執筆に際しては、小間典子氏から小間嘉幸氏の経歴と作品に関する多くの情報と資料をご提供いただきました。作品の描かれた場所の同定については、古代オリエント博物館研究員の下釜和也氏、アフガニスタン研究者の関根正男氏、ウズベキスタン大使館文化部のシロジュ・アズィーゾフ氏、孫崎紀子氏にご教示を頂きました。また、アフガニスタン遊牧民の写真は関根氏をご提供くださいました。ここに記して感謝申し上げます。

(5) 月刊美術編集部「特集 日中国交正常化が開いた秘境への扉」『月刊美術』357号、2005年6月、50-53頁。

(6) 寒雷発行所『寒雷』400号記念誌、1976年、2頁。

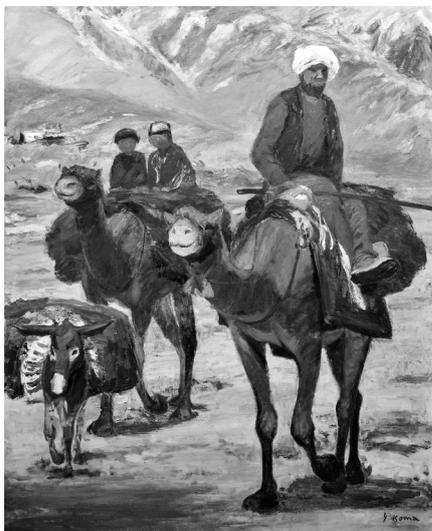
小間嘉幸油絵作品リスト

No.	作品名	制作年	描かれた国・都市または地域	モチーフ（場所など）	号数	備考
1*	草原の旅（口絵2）	1986年	アフガニスタン	遊牧民の移動	F100	第18回日展（1986年）出品
2*	杏咲く頃	1985年	アフガニスタン	遊牧民の移動	F100	第17回日展（1985年）出品
3	遊牧		アフガニスタン	遊牧民の移動	F100	
4*	ガズニへの旅		アフガニスタン	遊牧民の移動	F100	
5*	ガズニへ帰る	1988年	アフガニスタン	遊牧民の移動	F100	第20回日展（1988年）出品
6*	バドウィンの女達	1989年	シリア	遊牧民のテントの前にたつ女性	F100	第21回日展（1989年）出品
7*	黄河	1986年	中国		F100	第62回白日展（1986年）出品
8	マザリシャリフの廟		アフガニスタン・マザリシャリフ	ハズラト・アリー廟	F100	
9*	マザリシャリフ巡礼	1980年	アフガニスタン・マザリシャリフ	ハズラト・アリー廟	F100	
10	羊飼たち		アフガニスタン？		F100	
11*	ハンティング・ヴァレーに行く	1984年	アフガニスタン	遊牧民の移動 「ハンティング・ヴァレー」の場所は同定できず。	F100	第16回日展（1984年）出品
12	ガズニへの旅		アフガニスタン	遊牧民の移動	F120	
13*	砂漠の旅		アフガニスタン	遊牧民の移動	F120	
14*	バルミラ	(1990年代)	シリア・バルミラ	バルミラ遺跡 パールシャミン神殿	F120	
15*	アブンバイヤ広場		ウズベキスタン・タシケント旧市街	アブンバイエフ広場 現在のチョルスーホテルのあたり	F60	
16	アブンバイヤ	1975年	ウズベキスタン・タシケント旧市街	アブンバイエフ広場 現在のチョルスーホテルのあたり	F80	第51回白日展（1975年）出品 No.15の左半分を描いている。
17*	ガズニへの旅		アフガニスタン	遊牧民の移動	F80	
18	ニシャプール		イラン・ニシャプール		F80	
19*	ジェラーシュの遺跡	1993年	ヨルダン・ジェラーシュ	ジェラーシュ遺跡	F130	第69回白日展（1993年）出品
20*	遺跡守	1994年	不明		F80	第70回白日展（1994年）出品
21	シャリー・コシャックの城塞		アフガニスタン・バーミヤン	シャリー・コシャック	F60	
22	ブルーモスクの男		アフガニスタン・マザリシャリフ	ハズラト・アリー廟か	F50	
23*	カブルへの旅		アフガニスタン		F50	
24*	マザリシャリフの巡礼（口絵2）	(1980年代)	アフガニスタン・マザリシャリフ	ハズラト・アリー廟	F50	
25	五泉山		中国・甘肅省・蘭州		F30	
26	ニシャプール		イラン・ニシャプール		P40	
27*	莫高窟		中国・新疆ウイグル自治区	ベセクリク千洞仏	F40	
28	ブルーモスク巡礼		アフガニスタン・マザリシャリフ	ハズラト・アリー廟	M40	
29	羊飼		不明		F30	
30	埋葬		アフガニスタン		F30	
31*	マザリシャリフの楽師		アフガニスタン・マザリシャリフ	楽器は、ルバープというアフガニスタン源流の伝統楽器	F30	
32*	砂漠の民		アフガニスタン	遊牧民の移動	F40	
33	遺跡に立つ		アフガニスタン・カーブル	シェール・ダルワーザ	F20	
34	アレッポ城		シリア・アレッポ	アレッポ城	F20	
35	遺跡守		不明		P20	
36	ユルギップの穴居 —カッパドキア—		トルコ・カッパドキア	ユルギュップ	F12	
37	ニシャプール		イラン・ニシャプール		F8	
38*	ススト		パキスタン・シュスト		F8	
39	ギョレメの岩窟寺院		トルコ・カッパドキア	ギョレメ	F10	
40	火焰山とラクダ		中国 新疆ウイグル自治区		P10	
41	ヤワーシュ		トルコ	「ヤワーシュ」の場所は同定できず	P10	
42	イルクーツクの教会		ロシア・イルクールク	スバスカヤ教会か	F10	
43*	サマルカンド裏通り		ウズベキスタン・サマルカンド		F8	
44	サマルカンドへの道 —タシケント—		ウズベキスタン・タシケント		F8	

No.	作品名	制作年	描かれた国・都市または地域	モチーフ（場所など）	号数	備考
45	ビビハヌイムを遠望		ウズベキスタン・サマルカンド		F8	
46*	無題		ウズベキスタン・タシケント	タシケントのバザール風景	F8	
47	サマルカンド		ウズベキスタン・サマルカンド		F8	
48*	カブールの女達		アフガニスタン・カブール		F6	
49	天祝		中国 甘肅省、チベット族自治権		F6	
50	アフガニスタンの男		アフガニスタン		F6	
51*	クセルクセスの門		イラン	ヘルセポリス	P8	俳誌「寒雷」創刊400号記念誌（1976年）の表紙。
52	キャラバン		アフガニスタン	遊牧民の移動	F8	
53	水を運ぶ少年		不明		F6	
54	街の楽師		アフガニスタン・マザリシャリフ		F6	
55	無題		アフガニスタン		M40	
56	アフガニスタンの人々		アフガニスタン・マザリシャリフ		F20	キャンバス裏に「九耀展」と貼り紙あり。
57	クセルクセス門		イラン	ヘルセポリス	F20	
58	バーミヤン		アフガニスタン・バーミヤン	シャリー・ゴルゴラ	P20	
59	サマルカンドの丘		ウズベキスタン・サマルカンド		F20	
60	白い家		ウズベキスタン・ブハラ		F15	
61	無題		不明		F15	
62	無題		シリア		F15	
63	シャジョーイにて		アフガニスタン	「シャジョーイ」の場所は同定できず	F12	
64	アブンババイヤ		ウズベキスタン・タシケント旧市街	アブンババイヤ広場	F12	No.69の右半分の風景を描いている。
65	カブールの女達		アフガニスタン・カブール		F12	
66*	火焰山		中国・新疆ウイグル自治区		P10	俳誌「寒雷」創刊500号記念誌（1985年）の表紙
67	カブールへの旅		アフガニスタン		F10	
68*	バーミヤン石仏		アフガニスタン・バーミヤン		F10	
69	アブンババイヤ広場		ウズベキスタン・タシケント旧市街	アブンババイエフ広場 現在のチョルスーホテルのあたり	P20	
70	パールベック		レバノン・パールベック		F10	
71	城塞の丘一殺しの部落		アフガニスタン		F10	
72	イルクーツク		ロシア・イルクーツク	スバスカヤ教会	F8	
73	ベドウィンの女達		アフガニスタン・マザリシャリフ		F15	

- ・制作年の括弧内は推定年代
- ・作品番号の*は作品の画像あり

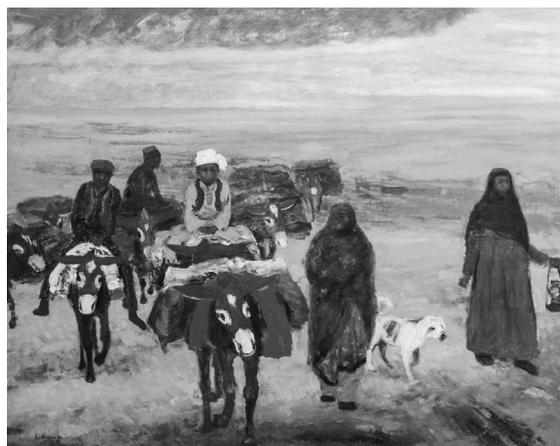
小間嘉幸の油絵作品



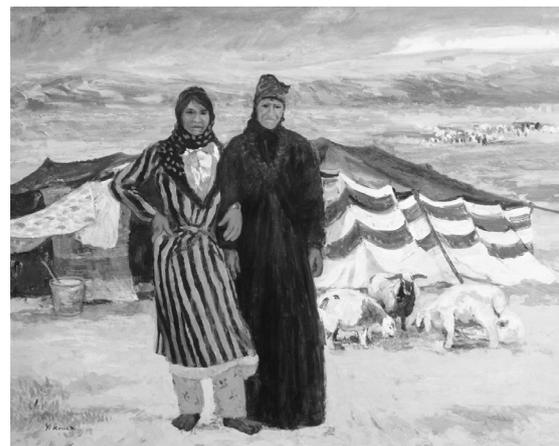
No.2 杏咲く頃 1985年



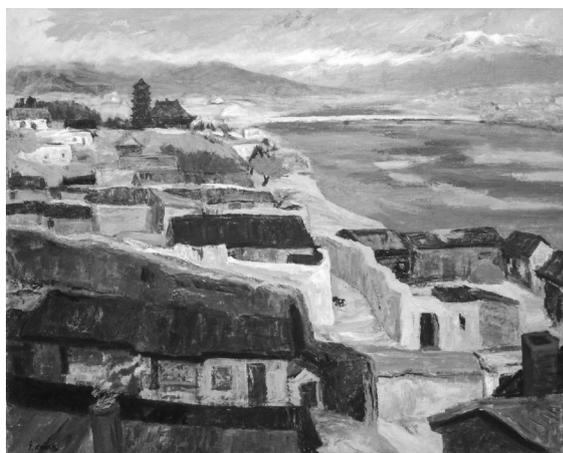
No.4 ガズニへの旅



No.5 ガズニへ帰る 1988年



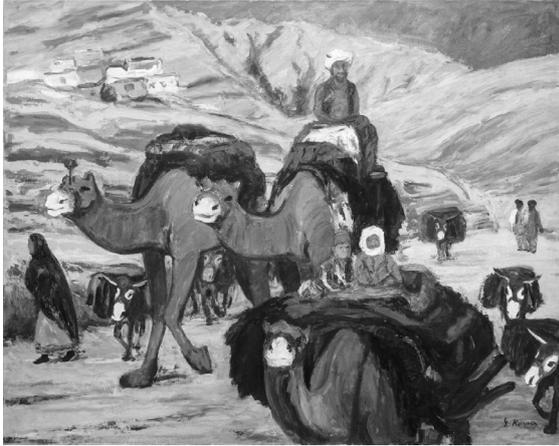
No.6 ベドウィンの女達 1989年



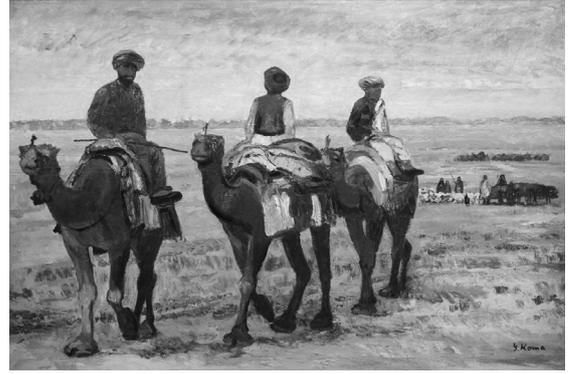
No.7 黄河 1986年



No.9 マザリシャリフ巡礼 1980年



No.11 ハンティング・ヴァレーを行く 1980年



No.13 砂漠の旅



No.14 パルミラ (1990年代)



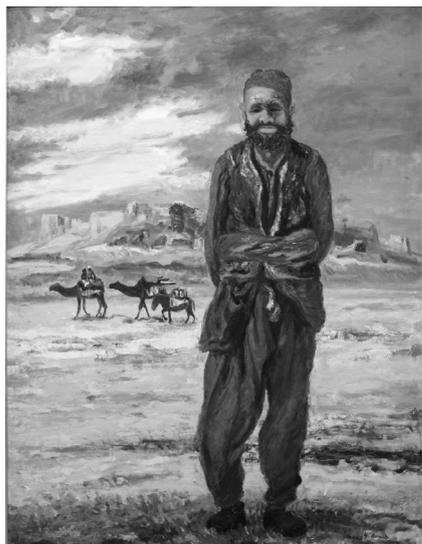
No.15 アブンバイヤ広場



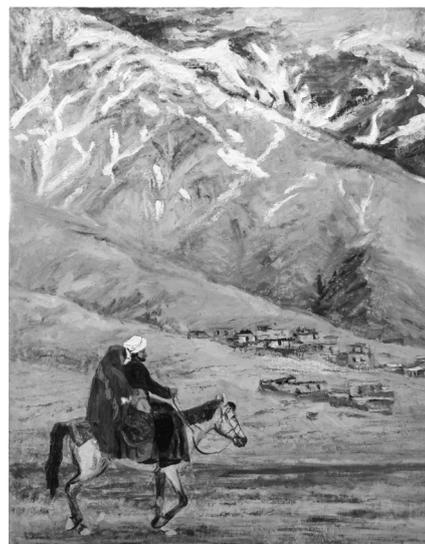
No.17 ガズニへの旅



No.19 ジェラーシュの遺跡 1993年



No.20 遺跡守 1994年



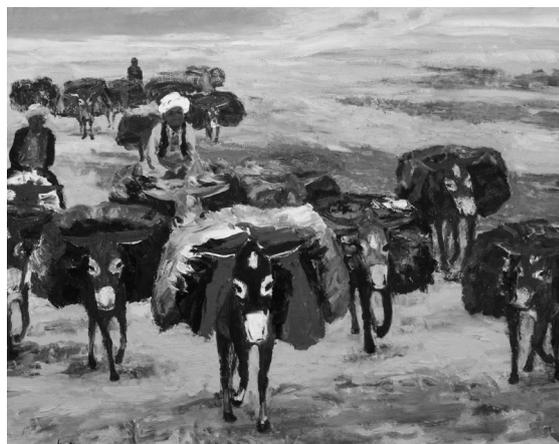
No.23 カブールへの旅



No.27 莫高窟



No.31 マザリシャリフの楽師



No.32 沙漠の民



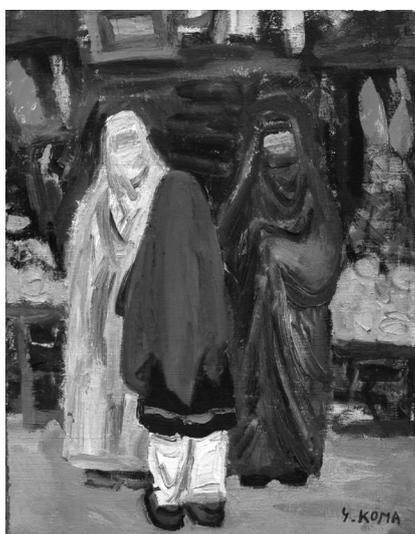
No.38 ススト



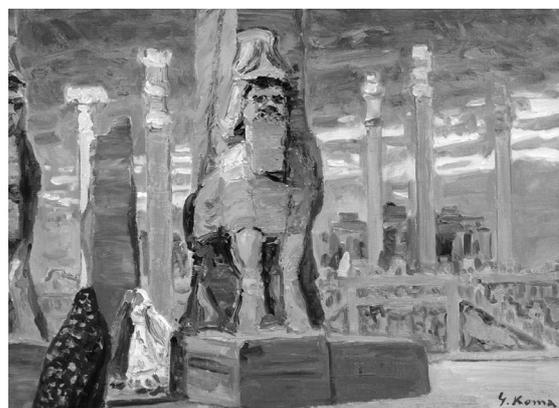
No.43 サマルカンド裏通り



No.46 無題



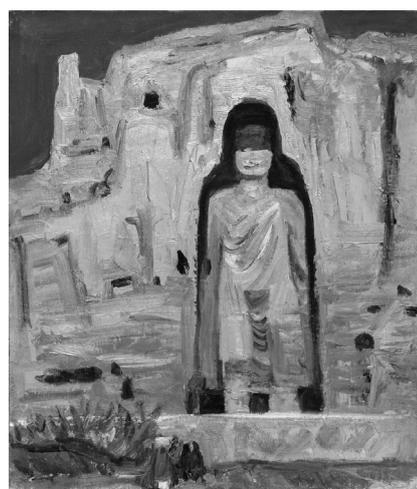
No.48 カブールの女達



No.51 クセルクセスの門



No.66 火焰山



No.68 バーミヤン石仏

横浜ユーラシア文化館 第9号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 9

2021年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館

〒231-0021 横浜市中区日本大通12

Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453

www.eurasia.city.yokohama.jp/

発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

印刷製本 株式会社佐藤印刷所

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures

12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan

Published by the Yokohama Historical Foundation

Printed in Japan by Sato Printing Co., Ltd.

©Yokohama Museum of EurAsian Cultures 2021

ISSN 2187-7734

横浜ユーラシア文化館
Yokohama Museum of EurAsian Cultures